

# 清末小説から 145

2022.4.1

呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針』——英人ブラック『車中の毒針』……………荒井由美 1

呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』——上村左川訳「五里霧中」の原作……………沢本香子18

呉禱漢訳ドイル「斥候美談」——高須梅溪訳「大佐の罪」……………樽本照雄32

“佚失”的《虛構小説 俄国皇帝》下篇——陈景韩转译 *Strange Tales of a Nihilist* 发表始末……………梁 艳43

民初小説年表の最新成果——黄曼『民初小説編年史』について……………樽本照雄49

清末小説から52

★『清末民初小説目録 第14版』は編集を継続中です。公開が決まりましたらお知らせします☺

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

## 呉禱漢訳デュ・ボアゴベ『車中毒針』

——英人ブラック『車中の毒針』

荒 井 由 美

### 1 問題の所在

呉禱漢訳英人ブラック『車中毒針』（原著者：英国勃拉錫克）に関して問題はふたつある。

ひとつは英人ブラックその人についての理解が深まっていない。なによりも彼が日本に帰化した外国人の芸人であることを知る必要がある。日本語を使用して日本人聴衆に向けて話芸など

を披露した。それを速記した単行本が刊行されている。ここを把握しそこねると誤解が起こる。すなわち原作者勃拉錫克と英人ブラックが別人だと誤認する研究者が出てくる。その結果が奇妙なことになるのは必然だ。

もうひとつはもとになる原作の探索が不首尾であった。『車中の毒針』は英人ブラックによる翻案だとの指摘は早くからなされている。これは事実だ。翻案だから原作があるに違いない。しかしその探索に成功した人がいなかった。結論を先にいえばオーストラリア人研究者がネットで言及していた（後述）。それが問題解決の重要な手がかりとなる。

振り返れば翻案の原作探索が困難だったのが大きい。呉禱漢訳『車中毒針』が出てくるまでの状況が完全には解明できなかったという意味だ。

そこで翻訳経過の大筋を最初に説明しておく。

まず「原作」が存在する（前もって少し説明するとその原作はフランス語で書かれた）。そ

の英訳がある。英人ブラックは英訳にもとづき自分で翻案した噺を日本の高座において日本語で「演述」した。今村次郎が「速記」し単行本が出版される。その日本語本を呉構が「漢訳」した。これが基本骨子である。図で示せば次のようになる。フランス語原作→英訳→翻案したものを日本語で演述→速記本→漢訳である。

## 2 日本の常識

日本において英人ブラックは昔から知られている。以前に作品集『快樂亭ブラック集』(2005)が文庫本で出ているくらいだ\*1。その帯には「西洋人落語家が語るエキゾチックな世界」と表示される。その通りである。



ちくま文庫『快樂亭ブラック集』

石井ブラック演述、今村次郎速記『車中の毒針』を呉構が漢訳した。このことも中村忠行「清末探偵小説史稿3」(1980)\*2が早くから説明している。知っている人にとっては当たり前のことにすぎない。英人ブラックについて中村は次のように紹介した。

石井ブラックは、本名ヘンリー・ジェイ

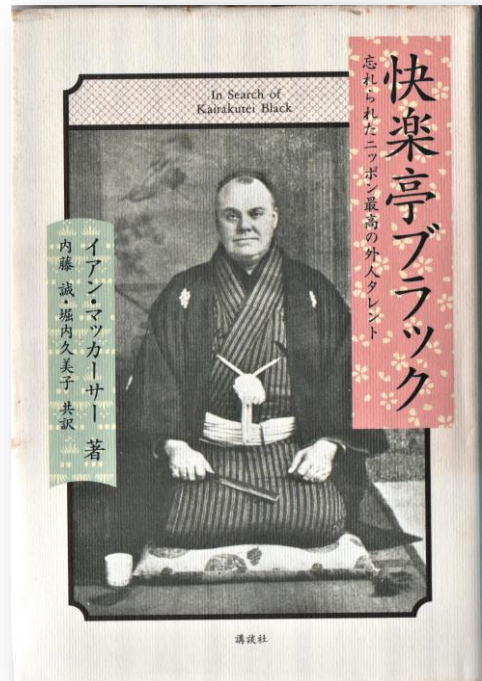
ムズ・ブラック (Henry James Black, 1857-1923) といひ、帰化英人であるが、日本語を巧みに操り、快樂亭ブラックと号して口座にも上り、人情噺を得意とした。

56-57頁

(『車中の毒針』が) 翻案ものであることは明らかであるが、原作が何かは詳らかでない。58頁

ひとことつけ加える。英人ブラックは日本で催眠術を公開したことで知られる。

イアン・マッカーサー『快樂亭ブラック』(1992)\*3も翻案8篇のなかに『車中の毒針』を含めている。



イアン・マッカーサー著、内藤誠・堀内久美子共訳

また文庫本の伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』の「解説」でも「原作があったと思われるが不明」(486頁)とある。

翻案とはいうまでもなく英人ブラックが当時発表された英文原作にもとづいて書き換えたことを指す。注意を要するのは英人ブラック自身が創作した英語作品、あるいは日本語作品では

ないことだ。重要なのは別人の英語本がすでに出ている。本稿ではそれを「原作」という。ただしそこで停止した。原作の探索は進まない。だから説明のしようがなかった。2020年末までのことである。

以上のような状況について中国の研究者が知っているのかどうかはわからない。中村論文が日本語だから読まれなかった可能性が高い。

### 3 研究情報伝達経路——収集の困難さと理解の不足

基本資料として阿英目録の記述を確認しておく。

[阿英123] 車中毒針 英 勃来雪克著。吳構譯。光緒三十一年（一九〇五）商務印書館刊。

英人ブラックの漢語表記が阿英目録では上のように「勃来雪克」になっている。これは実物とは異なる著者表記だ。該書の商務印書館「説部叢書」元版（清末）と後刷り初集本（民初）ともに「原著者：英国勃拉錫克」である。訳述者は吳構でいい。元版は錢塘、初集本は杭県と表示するのが違うといえちがう。1912年に仁和県と錢塘県が合併して杭県になった。それを踏まえた。

上の記述だけを見て勃来雪克が日本に帰化した英人ブラックだと説明することは可能だろうか。知識がなければ無理だろう。

吳構漢訳は日本語本を底本とする。そこから次のように推測することは可能だ。「勃来雪克」が書いた原作を名前を出していない誰かが日訳した。それを使用して吳構が漢訳した。日訳者名を書かないのは当時の中国出版界では普通のことだった。ここが出発点になる。「勃来雪克」原作→日訳→漢訳という見慣れた経緯だ。別に不思議ではない。ただし阿英の記述では日訳をした日本人が見えない。普通の研究者はそこで

思考が停止する。あるいは誤解する。「勃来雪克」とは別に日本語訳者が存在すると考える。阿英目録だけ見るとそう思うのもしかたがない。

それにしても阿英目録はなぜ原著者の表記を間違っているのか。阿英は実物をもとにして目録を作成したことで知られる。だからこそ信頼されている。単なる誤記だろうか。理由は不明だ。

『車中毒針』について言及する論文は多くない。いくつか紹介する。

たとえば張治『中西因縁』（2012）\*4だ。中村論文から32年後に出てきた張治著作である。吳構漢訳に対する彼の評価は高い。「翻訳家吳構がいる。彼の訳文は謹嚴忠実であり晩清小説翻訳家の多くがそれにおよばない。第一流といえる[有一位翻訳家吳構，晩清小説翻訳家多不如他訳文嚴謹忠実，算是第一流的]」53頁。張治の指摘は正しい。

『車中毒針』についての部分を引用する。簡潔に記述して次のとおり。

[張治A53頁] 《車中毒針》是翻譯的一部英国小説，從訳名上看應該是日文翻譯来的；

『車中毒針』はあるイギリス小説を翻訳したものでその訳名から見れば日本語から翻訳したものに違いない。

吳構の漢訳だと書く。ただし原作者、日本の訳述者、角書、出版社、刊年すべて不記だ。清朝末期の翻訳についておおよそのことを述べているだけ。概説だからそのつもりで見ることがある。

その説明から日本語にもとづいて翻訳したと考えていることがわかる。それで正しい。ここには示していない「英国勃拉錫克」原著を日訳した版本が存在していると把握する。すなわち上述の英語→日本語→漢語という当時よく見られた道筋である。

張治の認識は基本的に適切だ。ただしその日

本語訳については解説がない。その何かわからない日訳をもとにして呉樞が漢訳したことになる。簡単に紹介しただけだからそれ以上を求めることは無理だ。張治の高い調査能力をもってしてももともとなった英語原作を見つけることができなかつたということか。

張治は中村論文があることに気づいていないように思える。知っていれば何か説明するだろう。これを見て情報伝播の遅延と不確かさを痛感する。以前ならば中国の研究者が日本語論文を無視するのは普通だった。驚きはしない。今でもそうらしい。

現在のように電腦ネットが世界中に張り巡らされている状況を1980年代に誰が予測しただろうか。清末民初小説研究にまで影響が及んでいる。つまり研究情報が瞬時にして国境を越える可能性があることを示す。ただし前提がある。まず個人をとりまく通信環境の整備が必要だ。さらに自分からネットに繋ぐ意思を持つことが重要である。つないだところで検索の方向をどこに定めるかという問題もあるだろう。研究情報を共有しようにもその考えがなければ実現しない。言語の壁も存在する。特に清末の漢訳は日本語経由の作品がいくつもある。本稿でも扱っている呉樞漢訳がまさにそれだ。日本語を理解することが求められる。研究者が少ない原因だ。問題は簡単ではない。

張治論文に関連してひとつの例を示す。原作の実物を確認するためには相応の時間がかかることがわかる例だ。

樽本照雄「林訳シェイクスピア冤罪事件(要旨)」(『清末小説から』第85号 2007.4.1)がネットで公表された。2007年であることを明記する。張治が反応したかどうか。以下に説明したい。

もとの速報内容は次のとおり。林訳シェイクスピアの底本はクイラー=クーチ ARTHUR THOMAS QUILLER-COUCH (Q) 『シェイクスピア歴史物語 HISTORICAL TALES FROM

SHAKESPEARE』(ロンドン1899初版/ニューヨーク1900再版)である。実物2冊(初版と再版)を手元に置いて記述した。原作者名、書名と刊年を明記しているのが重要だ。

この発見は鄭振鐸の林紓批判(1924)を覆す。すなわち林紓は戯曲を小説にかえて翻訳したと鄭振鐸は書いて非難した。後に定説となる鄭振鐸の主張は基本から間違っている。それを裏付ける証拠そのものなのだ。林紓冤罪事件である。

これを素早く取り上げたのは范伯群「原原本本(二題)」(『書城』2008年8月号(総第27期))。また『清末小説』第31号 2008.12.1)であった。

著名な研究者范伯群が書いた文章だから中国の研究者にも周知のことになるだろうと思われた。ところがそうはならなかつた。やや意外に思う。

樽本の最新研究は把握していないと書く研究者もいる(劉宏照『林紓小説翻訳研究』上海世紀出版股份公司、上海訳文出版社2011.10.388頁)。たぶん関係論文を入手できなかった。あるいはQ本そのものを見る機会がなかつたのだろう。

樽本文章から5年後、范伯群論文から4年後に前出の張治『中西因縁』が出版された。

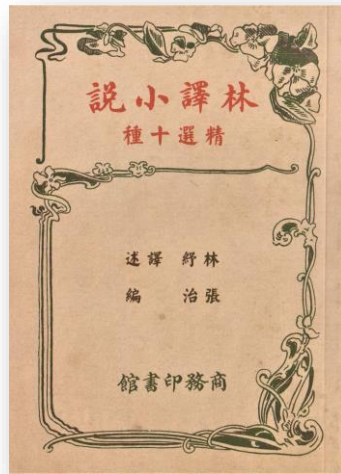
張治は林訳「亨利第四紀(ヘンリー4世)」についてつぎのように書く。「叙事体書きあらため原本の味わいは完全に失われた[改成叙事体完全失却了原本的味道<sup>①</sup>」(183-184頁)。莎劇を小説に書き換えたと説明した。これは林紓に濡れ衣を着せる従来からの見解だ。鄭振鐸が書いて拡散し林紓批判の決定版として学界に定着した。それを88年後の張治も堅持していることがわかる。

ところがこの箇所にもわざわざ注をつけた。注目する。

[張治A184頁] 注①考林紓幾部莎翁英國歴

史劇的訳作、其原本当是1910年前後倫敦出版的《莎翁史事本末》(*Historical tales from Shakespeare*)一書、作者是 Sir Arthur Thomas Quiller-Couch (1863-1944)。

林紓による数部のシェイクスピア英国歴史劇の翻訳を考察すれば、その原本は1910年前後にロンドンで出版した『シェイクスピア歴史物語』(英文省略)であるに違いない。作者はサー・アーサー・トマス・クイラー＝クーチ(1863-1944)である。



た。

この注釈が奇妙な点はふたつある。

ひとつ。本文で戯曲を小説にかえて翻訳したと書いていることと齟齬が生じる。注では林紓が戯曲ではなくQの小説本を底本としたと説明するのだ。本文と注釈が矛盾しているから奇怪である。整合性が欠けている。

もうひとつ。Q小説本を指摘しながらその刊年を「1910年前後」と書いている箇所だ。この不確かな記述はなにか。Q本そのものを手にしていない可能性はあるだろうか。まさかそんなことはないと思う。張治自身がネットによる英文書物検索に自信を示しているくらいなのだ。入手した当時の書物に刊年が書かれていない例もある。刊年不記の版本があることは珍しいことではない(open library、hathi trust 収録など参照)。

張治は独自にQ本を探し出したのだろう。しかし本文を修正する時間がなかったというのも不思議なことだ。無理やり注に追加した印象が強い。著作刊行寸前までQ本について把握をしていないように感じる。説明がないから詳細は不明だ。しかし結果として刊年の記述があいまいである事実は覆いようがない。

それから8年後の2020年によく変化が見られた。張治は『林訳小説精選十種』のために「解説」本(2020)\*5を書く。そこで林訳シェイクスピア歴史劇の底本を次のように明記し

[張治20C-70、71頁](林訳シェイクスピア歴史劇の各題名は省略する)依據的的都是1899年倫敦出版的《莎翁史事本末》(*Historical tales from Shakespeare*)一書、作者是英国作家、文学批評家圭勒一庫奇爵士(Arthur Thomas Quiller-Couch, Sir, 1863-1944)。<sup>[11]</sup>

依拠したのはいずれも1899年ロンドンで出版した『シェイクスピア歴史物語』(英文省略)であり、作者はイギリス作家、文学批評家のクイラー＝クーチ(英文省略)である。<sup>[11]</sup>

ここでようやく1899年(初版)であると書いた。文章公表の時間を表面から見ると不明確な表記をした2012年から確定の2020年までに約8年の歳月が経過している。情報の伝達が即座にできるとは限らない。そのことを示す事例だ。

その意味で張治がそちらにほどこした注釈も興味深い。訳す必要はないだろう。

注 [11] 樽本照雄：《林訳イプセン冤罪事件》一文(《清末小説通説》，第86号，2007年D)；参看樽本照雄：《林紓研究論集》，日本大津：清末小説研究会，2009年

版, 第81-101頁。80頁

『清末小説から(通説)』から『林紓研究論集』まで示して張治の探索能力の高さを誇示している。すばらしい。ただし次の書籍を追加していればもっとよかった。前出の樽本「林訳シェイクスピア冤罪事件(要旨)」(『清末小説から』第85号 2007.4.1) および『林紓冤罪事件簿』(2008.3.31) また『林紓研究論集』と統合した『林紓冤罪事件簿(統合増補版)』(2017.1.15 電字版)である。(日)樽本著、李艶麗訳『林紓冤案事件簿』(北京・商務印書館2018.7)を加えれば完璧だった。

ひとつ言えば張治は林紓冤罪問題について自分の判断を示していない。慎重に回避したと思われる。どんな事情があるのかは知らない。ついでに張治「【書評】《林紓冤案事件簿》」(『南方都市报』2019.1.17 電字版)があることも書いておく。

電脳とネットの時代だとはいえ結局は個人の意識に帰着する。それによって研究情報収集の困難さが増減するという意味だ。興味を持たない人に情報は集まらないだろう。

李艶麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』\*6がある。

その「晚清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」には『車中毒針』を記録する。組版どおりに示す。

15.《車中毒針》, 吳禱訳, 中国商務印書館1905

(英) 勃拉錫克, 原作不詳

(日) 石井ブラック(Henry James Black) 述, 今村次郎筆記《車中の毒針》, 三友社1891 170-171頁

李艶麗による上の記述は張治の説明と共通しているように思う。正しい表記の「(英) 勃拉錫克」の名前をあげたところまでは通常だ。

「原作不詳」とした箇所に注目する。前述のとおり英人ブラックの口述は翻案だという指摘が昔からある。そのことを示しているのだろう。先行文献を把握して堅実である。

「原作不詳」を織り込んでこの記載を筆者なりに解釈する。すなわちイギリス人勃拉錫克の原作不明作品がまずある。それを日本の石井ブラックが翻訳口述し今村次郎が筆記した。

李艶麗は勃拉錫克が英人ブラックの漢訳表記であることを理解している。それを踏まえれば英人ブラックが「原作不詳」の種本にもとづき翻訳口述し今村が筆記した。まさに正解である。

上の記述形式は中国の研究者が現在も利用している昔の樽目録第3版(齊魯書社2002)を参考にしているのだろうか。昔の目録だがそれから1例を引用する。

c 0244\*

車中毒針 (偵探小説)

(英) 勃拉錫克著 吳禱訳

中国商務印書館1905.12/1906.4二版  
説部叢書三=10

(石井) ブラック(HENRY JAMES BLACK 快樂亭ブラック) 述、今村次郎筆記『車中の毒針』三友社1891.10 [現代898] 『東方雑誌』8:1広告

第3版の記述には誤解を生じさせる要素はない。上4行が記号、書名、原作者と訳者、出版社と刊年を示す。下2行は注釈である。底本と参考資料を記す。

日本語底本に「英人ブラック演述」とある。吳禱がそれを漢訳して「原著者: 英国勃拉錫克」と誤った(後述)。そうして日本語底本が『車中の毒針』である。中村忠行論文を参照して記入した。間違いようがないと考える。ただし英人ブラックがもついた原作は不明のままだからその記述がない。

英人ブラック(本名 HENRY JAMES BLACK)

は石井姓の日本女性(名はアカ)と結婚し帰化した。芸名のひとつが快樂亭ブラックだ。くり返す。彼の日本語による演述を今村次郎が筆記して『車中の毒針』となった。それを呉禱が漢訳して勃拉錫克著『車中毒針』という経過である。英人ブラック本には彼がもつた原作について説明はない。呉禱が英人ブラックを原作者だと考えたのは当然であった。

翻訳方法が日中で共通している。日本語で「演述」するのを聞いてそのまま「速記」した。

林紓のばあいと同じだ。林紓は共訳者が外国語原書を手にして「訳意」「口訳」するのを聞きながら文語文に置きなおして「筆述」した。

英人ブラックの原作についての理解は文娟「試論呉禱在中国近代小説翻訳史中的地位」(2018)\*7にも受け継がれた。ただし微妙な変化が生じている。

該論文に「商務印書館所刊呉禱訳作単行本統計表」を掲げる。その該当箇所は次のとおり(217頁)。

書名	版權頁署名	首刊時間	叢書編号	来源
車中毒針	(英) 勃拉錫克原著	1905	説部叢書 1集30編	1891年三友社出版(英) 勃来雪克著, 石井ブラック述, 今村次郎筆記<<車中の毒針>>

来源に「勃来雪克著」と表記するのは【阿英123】を写したのだと思う。

細かなことを指摘する。ここにある「説部叢書 1集30編」は後刷りの初集第30編を意味する。こちらは民初に刊行された。ゆえに1905年の「説部叢書」はそれ以前の元版であって第三集第十編と表記されなければならない。

元版と初集本では集編番号が違っていることに文娟は気づいていない。その間違いは【編年③930】が「<<説部叢書>>初集第三十編」と注記した影響を受けているようだ。文娟は日本語カタカナを使用している。そうすると樽目録第3版に「説部叢書 1集30編」と表記する後刷り版本から適当に引用したのかもしれない。典拠を明記していないからどうにでも解釈できる。文献追跡ができないという意味だ。

文娟はさらに次のように説明する。『車中毒針』部分のみを抽出する。

而只署“英国勃拉錫克原著”的<<車中毒針>>……(中略)……由三友社出版的石井ブラック述、今村次郎筆記的<<車中の毒針>>……転訳而来。 218頁

「英国勃拉錫克原著」とだけ署名する

『車中毒針』は……(中略)……三友社出版の石井ブラック述、今村次郎筆記の『車中の毒針』から……転訳したものだ。

この説明と上の統計表「来源」欄を総合すれば文娟の認識は次のようになる。基本のところは英国「勃来雪克」が書いた英文原著がある。それを石井ブラックが日本語で口述し今村次郎が筆記した。さらに呉禱が漢訳して署名を勃拉錫克原著と表記した。英語から日本語へ、それをさらに漢語に翻訳したから転訳である。

文娟論文の核心部分は英国「勃来雪克」と石井ブラックを別人に認定しているところだ。来源欄に「(英) 勃来雪克著, 石井ブラック述」とふたりを並置したからそうとしか理解できない\*8。

文娟の説明がほかと異なるのはまさにこの別人説の部分だ。そうではない、というのなら注釈を書く必要があった。具体的に言えば(英)勃拉錫克原著、(英)勃来雪克著と石井ブラック述というそれぞれの関係を説明すべきだ。それをしていないからどうしようもない。間違っていると思う。

4 『車中の毒針』の原作——マッカーサーの  
 示唆

英人ブラックが使用した種本がある。いままで知られていなかった。

前出『快樂亭ブラック』(1992)の著者であるイアン・マッカーサー (IAN McARTHUR) が彼のウェブサイト Kairakutei Black (<http://henryblack.com.au>) で公表していることに気づいた。

マッカーサーは『車中の毒針』についてフランス原本があることを指摘している。FORTUNÉ DU BOISGOBEY, “LE CRIME DE L'OMNIBUS.” 1881. である。それを踏まえて探索し英訳本を見つけた(文末追記参照)。

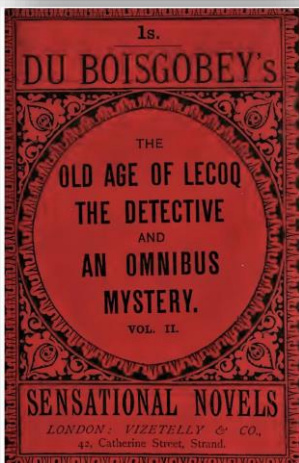
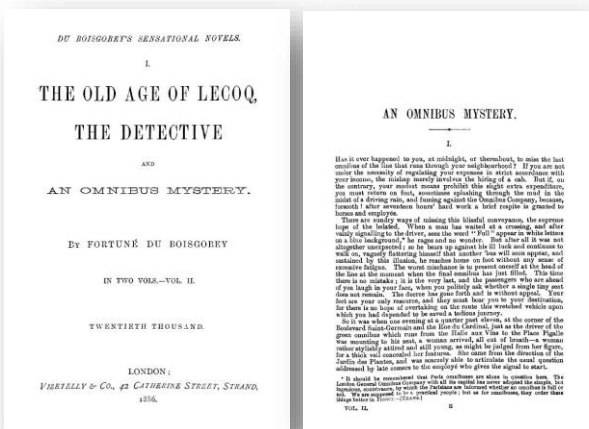
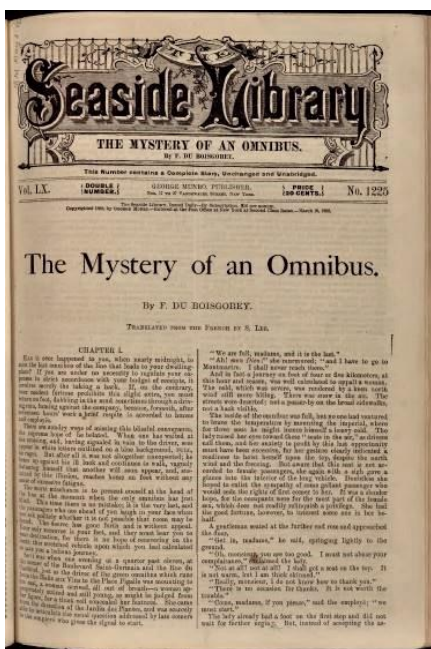
英人ブラックが使用した可能性のあるデュ・ボアゴベ原作の英訳本はアメリカ版とイギリス版の2種類がある。

アメリカ版は F. DU BOISGOBEY 原著、S. LEE 英訳 “THE MYSTERY OF AN OMNIBUS. [乗合馬車の謎]” SEASIDE LIBRARY VOL.60. NO.1225, NEW YORK : GEORGE MUNRO PUBLISHER, 1882. (Library of Congress 所蔵) だ。

あとで松村喜雄『怪盗対名探偵——フランス

ミステリーの歴史』(晶文社1985.6/1985.8.15 二刷。103頁)に「Le Crime de l'Omnibus (1882) (乗合馬車の犯罪)【英訳】The Mystery of an Omnibus」とあるのに気づいた。といってもこれが英人ブラック『車中の毒針』の原作だとは書いていない。あくまでもデュ・ボアゴベの作品という説明だ。

さらにもうひとつのイギリス版がある\*9。FORTUNÉ DU BOISGOBEY 原著、英訳者不記 “THE OLD AGE OF LECOQ, THE DETECTIVE, AND, AN OMNIBUS MYSTERY.” Vol.II, LONDON : VIZETELLY & CO. 1886. (影印本あり。また internet archive ほか所収) だ。全2冊のうちの第2巻に “AN OMNIBUS MYSTERY [乗合馬車の謎]” (129-235頁)を収録する。



扉1と2(架蔵) 表紙(ネットより)



以上のほかにも英訳があるかもしれない。英人ブラック速記本(1891)以前の刊行物ということでもとりあえず上記アメリカ版(1882)とイギリス版(1886)を底本の候補にあげておく。

どのようなものかそれぞれの冒頭を引用する。

【アメリカ版】 Has it ever happened to you, when nearly midnight, to miss the last omnibus of the line that leads to your dwelling-place? If you are under no necessity to regulate your expensed in strict accordance with your budget of receipts, it involves merely the taking hack. If, on the contrary, your modest fortune prohibits this slight extra, you must return on foot, dabbling in the mud sometimes through a driving rain, fuming against the company, because, forsooth, after seventeen hours' work a brief respite is accorded to horses and employés. p.3

ほとんど真夜中にあなたの住居に向かう路線の最後の乗合馬車に乗り遅れたことがあるだろうか。もしあなたが領収書の予算にしたがって厳密に費用を規制するの必要がなければ貸馬車を雇えばいいだけだ。もしその反対に控えめな資力でこのわずかな支出もできないようであれば歩いて帰らなければならない。泥につかり時には雨降る中を(乗合馬車)会社に対して怒りをぶつける。なぜならば、聞いてあきれるが、17時間の労働のあとで馬と従業者には短い休息が与えられるからだ。

【イギリス版】 Has it ever happened to you, at midnight, or thereabout, to miss the last omnibus of the line that runs through your neighbourhood? If you are not under the necessity of regulating your expenses in strict accordance with your

income, the mishap merely involves the hiring of a cab. But if, on the contrary, your modest means prohibit this slight extra expenditure, you must return on foot, sometimes splashing through the mud in the midst of a driving rain, and fuming against the Omnibus Company, because, forsooth! after seventeen hours' hard work a brief respite is granted to horses and employés. p.129

真夜中あるいはその時分にあなたの近所を走る路線の最後の乗合馬車に乗り遅れたことがあるだろうか。収入に応じて支出を厳密に管理するの必要がなければその災難は貸馬車を雇えばいいだけですむ。しかし逆に、あなたの控えめな収入がこのわずかに余分な支出を禁止するならばあなたは歩いて帰らなければならない。時には雨が吹き荒れる中で泥をはねながら乗合馬車会社に怒りをぶつける。なぜなら、聞いてあきれるが、17時間の労働のあとで馬と雇用者には短い休息が与えられるからだ。

皮肉を含んだ書きぶりが見て取れる。両者の英訳は単語の使用が異なるくらいで本文はほぼ一致している。英人ブラックがそのどちらを底本に使用したかは今のところ不明だ。なお上の「17時間 seventeen hours」に該当するフランス語は「16時間 seize heures」となっている。

本稿で比較対照する際に主として使用する『車中の毒針』は次の版本である。

英人ブラック演述、今村次郎速記『(探偵小説)車中の毒針』(三友社1891.10.19。国立国会図書館デジタルコレクション/大川屋書店1891再版。未見)。次も参照する。伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』(明治探偵冒険小説集2 ちくま文庫2005.5.10 所収)。ちくま文庫本は読みやすいようにひらがな漢字などの表現を書き改めている。また原本にある「叙(水石

隠士識)」は収録していない。

英人ブラック『車中の毒針』本文の冒頭を引用する。彼の語りがどのようなものか理解することができる(ルビ省略。句読点はちくま文庫)。

【ブラック】日本に人力と云ふ便利の物がございましていづれへ参るにもちよつと人力車へ乗れば早く行かれますが欧羅巴に未だ人力車如き便利の物がございません。尤も日本の人力車支那印度あたりでは当時盛んに用ひて居りますが。其代り挽く者があつても製造る事が出来ないで皆な日本に注文致して用いております。欧羅巴では人力車の代りに一匹馬の馬車往來に客待致しており升けれども、馬を使う事ゆゑ人力ほど便利と云ふ訳には参りません。値段は高くて昼間だけ営業いたし最う夜の九時十時ごろになれば皆な仕舞います。夫故に朋友の処ろへ遊びに参り遅くまで話込んで居れば帰りには市中乗合馬車に乗るか、歩いて帰るより外に仕方がない。9-10頁

前述の英人ブラック本(以下速記本と称する)は全14回ある。連続講談風で続きものだ。末尾に「次回に続く」があるのは中国の章回小説と変わらない。高座での物語りだから回によっては本題に入る前のいわば前口上、前説、マクラが述べられることがある。

第1回のマクラが上のとおりだ。英訳原作は乗合馬車から始まっていた。英人ブラックも乗合馬車(日本の俗称は園太郎馬車)について説明して導入部に設置した。彼の工夫は人力車を引き合いにだしたところだ。英訳原作に人力車があるはずもない。なじみの乗合馬車と人力車を組み合わせてヨーロッパ事情も付加した。日本の聴衆もよく理解しただろう。

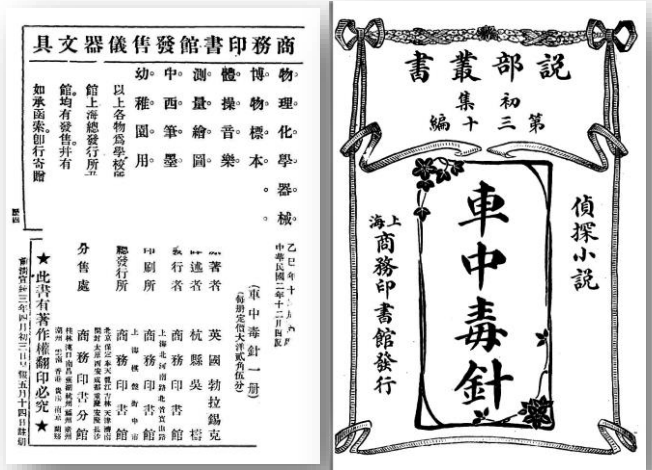
高座での語りをもそのまま記述している。流暢な話し言葉であることが文面からも了解できる。

この冒頭部分を呉禱はどのように漢訳したか。

## 5 呉禱漢訳を検討する

本稿で使用するのは次の版本である。

英国勃拉錫克原著、杭甯呉禱訳述『(偵探小説)車中毒針』上海・商務印書館、乙巳年十二月初版/中華民國二年十二月四版、説部叢書初集第三十編。表紙はリボン文様。電字版



『車中毒針』説部叢書初集本 表紙 奥付

なお呉禱が勃拉錫克と漢訳したのは「ブラック」の「ツ」を「シ」と見誤ったからだ。それで「錫」になっている。普通は伯来克、白蘭克などを当てる。

## マクラ

冒頭部分(1-2頁)を引用する(傍点傍線省略。以下同じ)。速記本と比較対照すると呉禱漢訳が完全に一致するわけではない。少し長い。文章を分割しながら説明する。

【呉禱】話説当今世界日進文明。凡是思想學問物質。愈出愈奇。愈有進歩。不但如此。就是人生日用所需。各種東西。也愈覺得十分輕巧。十分便利。如今別的都不題他。單説地方上來往交通頂便利的一宗。

さて今の世界は日々文明が進みましてお

しなべて思想学問生活物資がますます珍しくなり進歩しております。それだけでなく人々が日常生活に必要とする日用の各種品物もますます軽妙で十分に便利になったとも感じます。ほかのことは言わずとも交通往来だけでもとても便利になったということです。

ここは呉禱が創作して加筆した箇所だ。英人ブラックはいきなり人力車から始めた。そのまま漢訳すれば中国の読者には理解しにくいと呉禱は思ったらしい。そこで社会全体が進歩し便利になったことを述べて補いそれを人力車につなげる。

【呉禱】就如咱們上海天津的人力車(割注：我国人叫做東洋車)。只用一箇人在前拖著。近處十里二十里地方。不論什麼所在。都能去得。不論什麼時候。也能走得。凡是雇坐過的。沒一箇不稱他輕快便利。只可惜中国地方。還不能各埠到處通行。這倒是箇憾事了。且說歐洲各国地方。別的貨物。都比咱們中国美備。惟有那人力車一宗。倒却不見通行。

我らが上海天津の人力車(割注：我が国では東洋車と呼ぶ)のように前方で人がひとり引っ張りながら近くは10里20里(5km 10km)のところへどこへでも行くことができます。時間を問わずに行くこともできます。使ったことのある人ならば軽快便利であると言わない人はいません。ただ惜しいことに中国ではまだどこでも通行できるわけではなく残念なことです。さらにヨーロッパ各国ではほかの商品はおしなべて我が中国よりも十分に備わっているとはいえこの人力車だけは通行してはいません。

速記本では冒頭の次の箇所が相当する。対照するために再度引用する。「日本に人力と云ふ

便利の物がございましていづれへ参るにもちよつと人力車へ乗れば早く行かれますが歐羅巴に未だ人力車如き便利の物がございません」。英人ブラックは日本の事情として語った。呉禱はそれを上海天津に置き換えている。どうしてもそうしたかったらしい。速記本の骨子を把握しながら加筆した。

このあとに続く「尤も日本の人力車支那印度あたりでは当時盛んに用ゐて居りますが。其代り挽く者があつても製造の事が出来ないで皆な日本に注文致して用いております」は漢訳では省略した。この日本は排除したのである。

【呉禱】応酬来往。都須用著馬車。至少要一頭馬。多的兩馬三馬四馬不定。有的說歐洲人日常費用。專講浮華。這也可以見得一端了。他們本国人習俗如此。倒也罷了。只是有那些外国去的旅人遊客。如日本中国人。坐慣人力車的。又有勤儉為主的。到他們国裏去。總覺得有些不便。而且車價也太貴。

交際往来には馬車を使わなくてはならん。少ないのは1頭立て馬車で多いのになると2頭立て3頭立て4頭立てと定まてはいません。あるいはヨーロッパの人は日常の費用はもっぱら派手であるという人もいます。それはそうでありましょう。彼らの国の習俗がそういうことであつてそれまでのこと。ただ日本人中国人で外国へ行く旅行者は人力車に乗り慣れていますし儉約を旨としているのでそちらに行けばいささか不便でまた車賃が高すぎると感じます。

ここのもとになったのは次のとおり。「歐羅巴では人力車の代りに一匹馬の馬車往来に客待致しており升けれども、馬を使う事ゆゑ人力ほど便利と云ふ訳には参りません。値段は高くて」。基本的に対応しているのがわかる。呉禱による加筆の勢いが止まらない。ほとんど書き換えだといつていい。

【吳禱】還有一層。他們的馬車。大概都在日裏兜載生意。到得夜裏九點鐘時。就一概回行。不再出門兜攬。任是坐客去雇他。也不答允。除非自己備有車馬。纔能遲早任便。但祇那有許多人。箇箇備的起馬車呢。既不能自備馬車。

さらには彼らの馬車は大概昼間に客引きをして商売していますが夜の9時になれば皆帰ってしまいます。それ以上客引きはせず客が雇おうとしましても応じません。自分で車馬を用意すればいつでも好きなように使うことはできますがそんなに多くの人々がどうして馬車を用意できるでしょうか。自分で馬車を備えることはできません。

ここの速記本は「昼間だけ営業いたし最う夜の九時十時ごろになれば皆な仕舞います」だ。漢訳はそこを押さえた。それ以降は個人での馬車所有に言及して不可能だと締めくくる。書き換えて長くなっている。

【吳禱】凡遇今天。或是遊玩什麼山水景物。或是訪尋什麼親戚朋友。倘若時候遲了回家。街上就沒有馬車乘坐(割注：街上兜攬客人的上海叫做野鷄馬車)。除了自己步行。再沒別法。這是顯得外國也有不便之處。

もし今日どこかへ物見遊山に行くかあるいは親戚友人のところを訪問し遅くになって帰ろうとしても通りにはすでに馬車はありません(割注：通りで客引きをするのは上海ではヤミ馬車という)。自分で歩くよりほかに方法がありません。これが外国にも不便なところがあると明らかなのです。

ここの前半は速記本と一致している。すなわち「夫故に朋友の処へ遊びに参り遅くまで話込んで居れば帰りには市中乗合馬車に乗るか、歩行て帰るより外に仕方がない」である。

ただし重要な箇所を吳禱は漢訳しなかった。「市中乗合馬車」を省略したのはどういうことだろう。歩くだけしか方法がないとすれば問題が出てくる。『車中毒針』の原題である『乗合馬車の謎』は発生しようがない。毒針を使った殺人事件はまさにその乗合馬車の中で起こるからだ。吳禱による小さな見落としである。

マクラについてももう1ヵ所だけ例を示す。第2回の冒頭だ。

【ブラック】西洋では日本を差して美術の国と称づけました、此位美術に達して居る国は此の広い世界に御坐いません、西洋にも随分美術を嗜む人も御坐います良い美術家もあると雖も日本では上中下区別なしに總ての物に雅があつて美術の志しを持って居る、只だ西洋の美術日本の美術と大に異つて居る何方が宜いかと問いますれば夫は好々であると答へるより外に仕方がない  
23頁

美術をあげてその評価はそれぞれの好みによる。どちらが良いということにはならない。それだけのことだ。しかし吳禱はここにどうしても中国を割り込ませずにはいられない。加筆したのだった。

【吳禱】話説当今地球各国種種学問昌明。内中有一種科学。名叫美術。咱們中国。古時孔聖門下也有這一科。論語上所説遊於藝。這遊藝二字。就是美術的来源。凡是手中製作出来。有声有色。維巧維妙。能夠快人精神。怡人性情的東西。都是美術科中应有的。現今西洋如欧洲英法德意西班牙等国。東洋如中国日本。都於這一科学間很為講究。不過中国後世沒有這專門科学。就觉得讓他人占先。若論日本和西洋比較起来。内中也有西洋占勝的。也有日本見優的。常言道。各有所長。各盡其妙。12頁

さて当今地球の各国では種々の学問が盛んです。そのなかののひとつが美術という科学であります。我ら中国には古代孔子門下にもこれがあります。論語でいうところの藝に遊ぶということ。遊藝の2文字こそは美術の来源です。手で作り出したすべてのもの音あり形あり手の込んだ巧妙なものは人の精神を楽しませることが出来ます。人の性情を和らげるものはすべて美術の中になくはならないものなのです。現今のヨーロッパでイギリス、ドイツ、イタリア、スペインなどの国々、東洋では中国、日本ではみなこの学問を重んじております。ただし中国では後世にこの専門科学がなくなってしまうました。他人に先を越されたと思われます。もし日本と西洋を比較すればその中には西洋が勝っているものもあり日本が優れたものもあります。よくいうようにそれぞれに長所がありそれぞれが素晴らしい。

もとの速記本では日本と西洋を対比しているだけだ。呉禱はそれに論語を加えて中国事情を述べた。ただし「他人に先を越されたと思われます」ということになれば挿入するほどでもなかった。中国部分を除けばほぼ底本のとおりでとはいえる。

呉禱は基本的に底本を忠実に漢訳する。英人ブラックについては上記のようにそれが守られていない部分がある。それは呉禱が速記本についてよく理解しているからだろう。呉禱は内容を読んで英人ブラックが聴衆を相手に話を始めて当意即妙であることを了解した。それに自分も便乗して中国の読者に向かって随意に語りかけたというわけだ。話芸であるから中国人によくわかるように改変することが必要だと考えた。

改変といっても部分的なものだ。主としてマクラ部分に手を入れた。事件の流れについては忠実な漢訳である。

### 『車中毒針』について

本題の殺人事件について簡単に述べる。筋をたどりながら部分的に引用して速記本と呉禱漢訳の実例を見てみよう。

【ブラック】今距る三年前時は二月二十三日仏蘭西の都巴里に於て夜の十二時頃フライ街の角より市中乗合馬車ただいま出やうとする處ろ馭者は台に乗り手綱を手にとりて馬に鞭を当て、走らせやうとする處ろへ婦人が一人駆けて参り 婦「馬車屋さん一寸待て下さい五性だから乗せてツて下さい  
[ ] 車掌「御生憎様最う一這で御坐います [ ] 10頁

「二月二十三日」と具体的な月日を述べる。しかし原作にはそのような表記はない。「夜の十二時頃」に該当するのは「夜の11時15分 [one evening at a quarter past eleven]」(p.3/p.129) である。

速記本は話者について「婦」「車掌」と書きつける。高座での物語りだから演じ分けているのだ。それを細かく写した。速記者の工夫である。速記本の書き癖なのか閉めのカッコを使用していない。なくてもかまわない。本稿では補っておいた。

【呉禱】閑話少説。且説離現在三年前。出一樁奇案。是西曆二月二十三日。夜裏十二点鐘時候。法蘭西巴黎京城。福来街轉彎之處。有一輛馬車。車夫坐在車上頭。手裏拿著鞭子。正要叫馬轉彎。忽然一箇婦人。劈頭劈面跑過來。对着車夫喊道。噯。兀那車夫小哥兒。請你稍微等一会兒。讓我搭坐了去。車夫道。你老人家真不懂事。俺的車。立刻就要卸下客人回去的。2頁

閑話休題。さて今を去る3年前、不思議な事件が発生しました。西曆2月23日の夜

12時にフランスはパリの都フライ街の曲がり角に馬車が1輛ありました。御者が上に座り手に鞭を握ってちょうど馬を出そうとしているところに婦人が真正面から走ってくると御者に向かって叫びました。「アレ、あの御者のお兄さんちょっと待ってください。乗せてやってください」。御者は言います。「お客さん本当にわからない人だね。俺の馬車はすぐに客を下ろして帰らなくちゃならないんだ」

もう満員だというのが速記本だ。呉禱漢訳はそれとは違う。回送すると変更した。それ以外はほぼ直訳に近い。

呉禱は速記本にある話者の表記は採用しなかった。従来からある「○○道」という形を踏襲している。

御者と婦人のやり取りを聞いた乗客のひとりが女性がかわいそうだから乗せてやれという。規則がうるさいからそれはできない、という会話がこのあとに続く。結局、男性客が婦人に席をゆずり自分は御者の隣りに移動する。婦人は男性客に大きく感謝して馬車に乗り込む。そのあとの箇所が速記本と漢訳とは大きく異なる。

【ブラック】(女性は)お礼を言つて馬車へ乗り今の客人が明けて呉れた場所へ座り、男は馭者台に乗り馭者はエイと馬にステツキを入れて飛び出したが、此の處ろ御馴染の園太郎でも居つて喇叭を吹てお婆さん危険いよ一と御陽気に伺へば一愛嬌にもなるが私しは生憎喇叭も鈴も持たない、馬車の声色至つて不得手の方で御坐いますから其の辺の處ろは御用捨を願います 13頁

ここにいう「御馴染の園太郎」は四代目橋家園太郎(本名石井菊松、別名ラッパの園太郎、1845-1898)のこと。当時人気の落語家だ。乗合馬車の御者が吹くラッパをまねながら口座に

上がった。「ラッパの園太郎」と呼ばれた理由だ。乗合馬車が「園太郎馬車」と俗に言われることにもつながる。

英人ブラックが後半部分で園太郎の実際を紹介しているのが興味深い。園太郎は馬車の御者が声を張るのを声帯模写した。御者はラッパを吹き鈴を鳴らし回りの人々に注意を喚起していたという場面だ。「お婆さん危険いよ一と御陽気に伺」うのがの御者常用のセリフで園太郎がそれをまねた芸風だとわかる。

正岡容<sup>10</sup>は「円太郎馬車」の項目でそのセリフを紹介している。「四世橋家円太郎が、高座でこの馬車の真似をして、「おばあさんあぶないよ」と馭者のようにラッパをふいたのでこの名が起つた」42頁

本筋とは関係のない実際風景を語りの合間に挿入する。英人ブラックが当時の高座で行っていた様子が手に取るように生き生きと記録されている。

こういう臨機応変な箇所は呉禱にとっては漢訳がむつかしくなる。日本語を書物で学習しただけだ。日本の演芸場がどのようなものかその知識があつたか不明である。知っていたとしても日本の芸人のことだ。清末の読者にとってはあまりにも関係が薄い。そこで呉禱なりの工夫をした。一般的事情説明に変更したのである。

【呉禱】(那箇奶奶)一脚跨入馬車。那坐客和車夫並坐在車沿上。車夫將韁繩一緊。加上一鞭。那馬很快的駛了去。車夫一面對坐客道。有件事還求你老原諒。這裏若搖起鈴聲。吹起喇叭來。被警察聽了。很為危險。若是白天。正大光明去探望客人。原可用得。可奈如今深夜違章。喇叭和鈴。一樣也沒有帶著。馬車在街上走。很為不便。這些所在。要求你老原諒。看官知道西洋的馬車。不似咱們中國北方的驢馬車子。那樣質樸遲笨。馬車上都裝著一箇手捏喇叭或是銅鈴等類。駛的時候。以便放出聲音。使行路人等知道

避讓。只看上海那些車輛。也是如此。如今這位坐客的馬車。只因時候過遲。不得聲響。驚動沿街居民。因此那車夫說這樣話。5頁

(その奥さんは) スッと馬車に乗り込みます。あの客は馭者と馬車のへりに並んで座ると車夫は手綱を引き締め鞭を加えて馬はすぐに走りだしました。御者は客に向かっていいいます。「すみませんって。ここで鈴の音をさせたりラッパを吹きましてそれを警察に聞かれでもすりゃ危ないんで。もし昼間なら公明正大にお客にご挨拶ということでよろしいんですが今のような深夜ではどうにも違反でしてな。ラッパと鈴は両方ともに持ってきていないんで通りを行くときにゃ不便なもんでがす。そういうことってお許しのほどを」。読者が知っている西洋の馬車は我らが中国北方のラバ車が素朴で愚鈍であるのとは違う。馬車には手作りのラッパか銅鈴のようなものを備えている。走るときには音声を放出して通行人に避けるようにと知らせる。上海の車輛を見てもそうになっている。今あの客の馬車は時間が遅すぎて音を出して通りの住民を驚かせることが許されない。ゆえに御者はそのように言ったのだ。

速記本に出てくるラッパの園太郎は引っ込めて御者の説明に換えた。内容も追加している。しかも「看官」以下は呉禱自身が乗り出してきて追加した補足説明である。

清末の読者には日本の落語家園太郎は不要だと判断して別人ならばその部分を削除するだろう。しかし呉禱は底本の速記本になんとか忠実であろうとした。読者の理解を助けるために考えて書き直した。その真摯な翻訳姿勢が伝わってくる箇所だ。しかもその説明は間違っていない。読者は前の箇所からどこにも引っかからずに素直に読み通しただろう。

呉禱は日本の有名芸人については書き換えた。

といいながら英人ブラックが日本について説明することをすべて削除したわけではない。速記本の記述をなるべく生かして漢訳するのが彼の基本方針だ。次を見てほしい。

【ブラック】日本なれば金の沢山ある婦人を女房に持ちたいと思へば先づ後家さんを騙すより外に仕方がないやうけれども歐羅巴は然うでない、若くてもお金を沢山持参して来る女が幾らもあります。37-38頁

明治時代の高座で語られた話だからそのつもりで読む必要がある。財産を所有する女性が犯罪者の標的になりやすいという一般論だ。しかもそれが物語の伏線にもなっている。

【呉禱】若在日本。婦人家雖是有錢。雖是丈夫去世。也不能另外嫁人。那些居心不良的人。除了欺騙於他。就沒有別法。但歐洲却不然。任是年輕。帶着許多錢財復嫁人的婦女。很也不少。25頁

もし日本であれば婦人が金を持っていようが夫が逝去していてもほかに嫁ぐことはできない。よからぬ下心があるやつらは彼女を騙すよりほかに仕方がない。しかしヨーロッパはそうではない。若くてもお金を沢山持って嫁ぐ女性がいくらでもいます。

というわけで遺産相続をする若い女性が犯罪の対象になる。そうして乗合馬車の中で毒針を使用した殺人事件が発生した。そういう段取りである。『車中の毒針』という日本語題名になった理由だ。

金持ちの兄弟がいる。弟が死亡した兄の財産を狙う。兄には遺産を相続する娘がいることがわかり人をやって殺させた。ところが被害者には妹がいて若い画家のモデルをつとめている。その画家というのが乗合馬車での乗客だった。偶然に凶器である毒を塗った留め針 (pin) を

そうとは知らずに拾う。その友人が探偵役になって犯人を追跡する。妹も狙われて命が危ない。

呉禱の漢訳はマクラの部分以外は日訳に忠実である。

題名になっている留め針について原作と英人ブラック、呉禱の翻訳を示す。

【アメリカ版】 a gilt pin, of the kind used to fasten ladies' hats. p.5

婦人の帽子を留めるために使われる金メッキのピン

【イギリス版】 a gilt pin, of the kind used to keep ladies' hats and bonnets in position. p.135

婦人の帽子やボンネットを所定の位置に留めるために使われる金メッキのピン

【ブラック】 真鍮か何ぞで出来た金減金になつてゐる女の着物を止める針 21頁

【呉禱】 乃是箇黄鍍金造成婦女們衣裳上擲拍的小鍼 10頁

金メッキになっている女性の着物を留める針

呉禱の漢訳は日訳そのままである。ただし「擲」は普通は鼻をかむという意味だ。訳文として不適切な気がする。誤植かあるいは呉禱の使用癖の方言かもしれない。

小さな誤りはある。モーグ(死体公示所)を地名「在摩革地方」(15頁)と間違ふ。日本語にカタカナが使用されていれば人名か地名だと判断される。それに惑わされたい。

マクラは除き、本筋について呉禱漢訳には大きな変更はないと考えてよい。

ひとつ気がつくことがある。本漢訳にいて呉禱は日本語音をそのまま漢字に写そうと努力している。

たとえば猫が「ニヤア」という個所は「呢啊哦(割注:三字連読)」(19頁)とする。割注にあるように3文字を連続して読めば「ni,a,o)

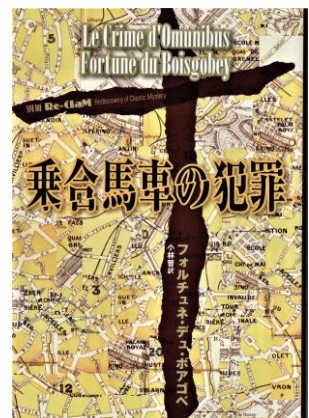
で「ニヤア」だ。漢語の「喵喵」「咪咪」にしてもいいようなものだがそうはしなかった。

日本語を音訳するのは橋名にも見える。「新橋」は「新巴希 xinbaxi 橋」に「万代橋」は「曼代 mandai 橋」に「日本橋」は「尼ト恩 nibu'en 橋」(68頁/51頁)という具合だ。そのまま日本語漢字を使用すればいいようにも思う。しかし舞台がフランスだから日本語漢字では統一をとることができないという判断だろう。

「登場人物対照表」を掲げる。これを見ても音訳で重なる人物がいる。

「加納」が「葛撓 genao」、「伊藤」が「伊達峨 yida'e」、「一蔵」が「夷蘇 yisu」、「山田」が「夏密丹 xiamidan」、「土屋」が「支梯亜 zhitiya」だ。なるほどそれらの漢字を表面的にながめればフランス人に見えなくもない。呉禱が漢訳に工夫をしているという理由だ。この独特な漢訳方法はほかに『賣国奴』(1905)、『寒牡丹』(1906)、『寒桃記』(1906)、『棠花怨』(1908)などがある。罍

【2021.3.29追記】『車中の毒針』の原本が日本語訳されていることを知った。フォルチュネ・デュ・ボアゴベ作、小林晋『乗合馬車の犯罪』Re-ClaM 事務局2020.3.31。古書山たかし「『乗合馬車の犯罪』解説」に次のように解説する。「本書は一八八一(明治一四)年に刊行されてから十年後の一八九一(明治二四)年、英国人噺家である快樂亭ブラックにより長篇噺『車中の毒針』として高座にかけられ、単行本化もされているので、日本語への移植としてはかなりスピーディだったといえる」



312頁



登場人物対照表

英 訳	英人ブラック	呉 構	備 考
Paul Frenense	加納元吉	葛撓	画家
Binos	伊藤次郎吉	伊達峨	加納の友人、探偵役
Pia	鈴木おのぶ(延)	史緑波	モデル、お勝の妹
Bianca Astrodi	鈴木おかつ(勝)	史姿玉	被害者。母はおとみ(史黛眉)
François Boyer	山田一蔵	夷蘇	お勝、お延の父親、ドイツで死去
Paulet	山田金三郎	夏密丹	金持ち隠居、一蔵の弟
Marguerite Paulet	お高	棠佳	山田の娘
Auguste Piédouche (別名 Blanchelaine)	土屋弥平	支梯亜	三百代言、もと探偵と自称、泥棒
Madame Blanchelaine	土屋の女房	支家的	毒針殺人の実行者
Maitre Drugeon	井上	魏嘉西	一蔵の番頭、ドイツから来た

【関連論文】

- 小島貞二『快樂亭ブラック』国際情報社1984.8.7  
 小島貞二『決定版 快樂亭ブラック』恒文社1997.8.10  
 佐々木みよ子・森岡ハインツ『快樂亭ブラックの「ニッポン」』PHP研究所1986.10.6  
 趙 霞「二十世紀初留学生訳者特点剖析——以呉構  
 《小説月報》前期(1910-1920) 翻訳作品為例」  
 『中国近代文学学会小説分年会暨中国近代小説学  
 術研討會論文集』開封・河南大学文学院2013.9

【注】

- 1) 伊藤秀雄編『快樂亭ブラック集』明治探偵冒険小説集2 ちくま文庫2005.5.10
- 2) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(3・完)」『清末小説研究』第4号 1980.12.1。56-59頁
- 3) イアン・マッカーサー著、内藤誠・堀内久美子共訳『快樂亭ブラック』講談社1992.9.17/ 1992.10.2二刷。145頁
- 4) 張治『中西因縁：近現代文学視野中的西方「経典」』(上海社会科学院出版社2012.8)
- 5) 張治「解説」林紓訳述、張治編『林訳小説精選十種』北京・商務印書館2020.6
- 6) 李艶麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上

海社会科学院出版社2014.8

- 7) 文娟「試論呉構在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.10.15
- 8) 次を参照。荒井由美「【書評】呉構についての文娟論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1
- 9) 次を参照した。ALLEN J. HUBIN “THE BIBLIOGRAPHY OF CRIME FICTION 1749-1975” PULISHER'S INC. 1979. 127頁。DU BOISGOBEY, FOORTUNE (HIPPOLYTE AUGUSTE). 1821-1891. The Mysery of an Omnibus. Munro, 1882./British title: An Omnibus Mystery (with: The Old Age of Lecoq, the detective, q.v.). Vizetelly, 1885
- 10) 正岡容『明治東京風俗語事典』ちくま学芸文庫 2001.2.7

次号の公開は2022年7月1日を予定しています  
 清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』  
——上村左川訳「五里霧中」の原作

沢本香子

漢訳されたギ・ド・モーパッサン (HENRI RENÉ ALBERT GUY DE MAUPASSANT、1850-1893) の小説は清朝末期と民国初期では数の上ではっきりと差が出ている。

清末では多くない。

陳景韓(冷血)が日本語から重訳した「義勇軍」(1904)、同じく呉禱『五里霧』(1907)がある。漢訳者名不明の「将母同」(1909)、周作人「月夜」(1909)くらいだ。

民初になると重版を含めて100点前後に急増する。

1914年以後から雑誌『小説月報』『小説大観』『礼拝六』『小説海』『新青年』などに掲載された。短篇であるというので新聞にも見える。その状況からいえばモーパッサン人気が大きく上昇した。

本稿では清末に発表された呉禱漢訳モーパッサン『五里霧』について説明する。呉禱だから日本語訳を底本にしているのは間違いない。

該作品のばあいも経路が少し複雑だ。図式すると次のようになる。フランス語原作→英訳→日訳→漢訳である。

呉禱漢訳が上村左川の日訳を底本にしているのは事実だ。問題は左川がもついた英語重訳本にある。作品集に贋作が混入しているという。

左川の翻訳は大丈夫なのか。

## 1 上村左川について

モーパッサン作品の英訳にもとづいて日本語訳したのは上村左川(かみむら させん)だ。

左川について詳細は不明である。大町桂月(芳衛)「上村左川を弔ふ」(1905)<sup>\*1</sup>によれば土佐佐川町生まれ。号左川は生地になむ。博文館編集者を長く勤めた<sup>\*2</sup>。英語、漢学、国語に通じ、漢詩、短歌、新体詩をよくしたという<sup>\*3</sup>。

単行本の奥付には「上村貞子」と表示するものがある。これが本名であるらしい。「貞子」は「ただし」と読むのかどうかはわからない。大町桂月の追悼文が遅くとも1905年以前に公表されている。そこから1905年には亡くなっていると思われる。ただし1910年に上村左川訳『母の恋』が刊行されるのと合致しない。理由は不明。

左川は英語に通じていたからドイル<sup>\*4</sup>、ホーソン、ポーを翻訳したのはわかる。ほかにはフランス、ロシアの作品がある。それらは英訳に基づいた重訳だと考えていだろう。

左川翻訳のモーパッサン作品は以下のとおり<sup>\*5</sup>。原作と英訳題名を補った。

「死人の秘密」『女学世界』明治35.3、  
／LA VEILLÉ, 1882 (お通夜)／英 A  
DEAD WOMAN'S SECRET (第11巻)

「五里霧中」『太陽』明治35.4、  
／MONSIEUR PARENT, 1885.11.10-11.12  
(バラン氏)／英 Monsieur parent (第3  
巻)／3rd ser.／短篇集 MONSIEUR  
PARENT 1886

「水辺の森」『文芸倶楽部』明治36.7、  
／UNE PARTIE DE CAMPAGNE,  
1881.4.2, 4.9 (野あそび)／英 a country  
excursion (第6巻)

「兄弟」上下『文芸倶楽部』明治36.9、

10、／ [山川93-338] PIERRE ET JEAN  
(ピエールとジャン) 1888／英 Pierre  
And Jean

「大佐の意見」『太陽』明治37.8、／LES  
IDÉES DU COLONEL, (大佐の考え)／  
英 THE COLONEL'S IDEAS (第6巻)

興味深いのは左川が使用した英文底本だ。日訳が公表される前後の英文単行本も少数だが見た\*6。しかし「五里霧中 (パラン氏 MONSIEUR PARENT)」を収録しているのはやはり限られてくる。該当するのは「アフター・ディナー・シリーズ THE AFTER-DINNER SERIES」だ。日本ではよく知られており「食後叢書」または「食後双書」と称せられる。この叢書については必ずといっていいくらいに田山花袋の文章が引用される。花袋がモーパッサン短篇集の英訳本を注文し受け取って喜んだという内容だ。

## 2 「アフター・ディナー・シリーズ」について

モーパッサン短篇集が「アフター・ディナー・シリーズ」の名前をつけられて全12巻が刊行された。明治時代に日本へ輸入されたものだ。花袋の回想『東京の三十年』(1917) \*7が有名だ。そのうちの「丸善の二階」から冊数に関する部分のみを引用する。そこに注目するのは冊数について後の研究者が違うことを書いているからである。記述が一致しないのには理由があるはずだ(傍点筆者。以下同じ)。

安いシリーズで、汚い本であつたけれど、それが何んなに私を喜ばしたであらう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得るといふことが、堪らなく私を得意がらせた。私は撫でたりさすつたりした。280頁

花袋が入手した叢書(シリーズ)は「十二冊」

だったと書いている。そこを確認しておく。

丸善関係で木村毅の文章を紹介する。示す数字が違うのだ。

木村毅『丸善百年史』上巻(1980) \*8は次のように説明している。

この年の「学燈」にいくらか注意すべき事として、モウパッサンとマクス・ノルダウの「デゼネレーション」の一頁広告が、しかも見開きになってのせてあることを挙げ得る。626頁

わが自然主義運動は田山花袋が震源地と云つてよく、その花袋がモウパッサンへの傾倒もつとも深かつたのである。彼は After-Dinner Series という十一巻の短篇集英訳ができたことを、丸善の目録で知ると、矢もたてもたまらず、つとめ先の博文館から著書の稿料の先借りをし、雨をおかして駆けつけて買いとった感激の思出を語っている。626-627頁

確認しておくが花袋は12冊と書いていた。それを木村毅は11巻(冊)と説明している。

その広告文は次のようなものだという。「SHORT STORIES of Maupassant / After-Dinner Series, 11 vols. Pedlar and other Stories; A Lady's man; A Woman's Life: Each ……50 sen」(627-628頁。The After-Dinner Series の表紙写真を掲げている)

その広告文を見ればたしかに「11巻 11 vols.」とある。そこは置いておいてこの広告の内容が奇妙なのだ。収録作品に疑問符がつくからである。“Pedlar”は第11巻ではなく第12巻収録だ。しかも“A Lady's man”と“A Woman's Life”はこのシリーズには未収録なのだった。広告だからそのままを信頼することはできないだろう。

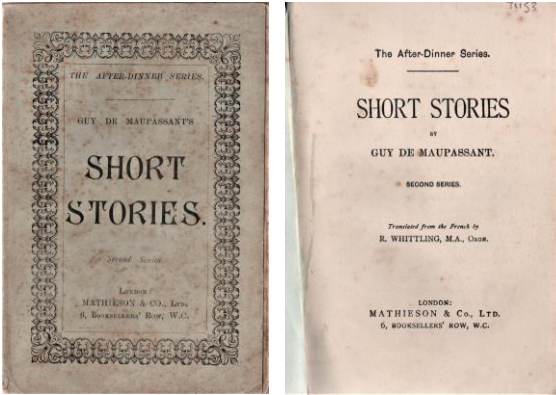
それでも冊数についてはそれを根拠にしたものか木村毅は英訳短篇集シリーズが「十一巻」

あると書いた。くり返すが花袋が回想した「十二冊」とは明らかに異なる。

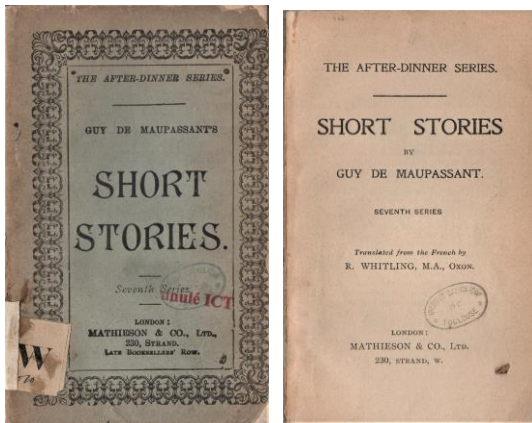
日本では長らく全11冊だと考えられていたそう。シリーズ第11巻の表紙には「第11巻、叢書最終巻 ELEVENTH AND LAST SERIES」とある。上の広告と同じだ。そう書いてあるから全11巻で完成したと誰しもが思うだろう。国立国会図書館所蔵本も第11巻までだ。確定しているように考えたのも無理もない\*9。

ところが実は全12巻あることが指摘されている\*10。花袋が回想したとおりの第12巻(冊)が存在したのだった。

さてこの短篇英訳シリーズの第2巻と第7巻を見本として示す(架蔵)。



第2巻 表紙と扉



第7巻 表紙と扉

第2巻表紙 “THE AFTER-DINNER SERIES. / GUY DE MAUPASSANT'S / SHORT

STORIES. / Second Series. / LONDON: MATHIESON & CO., LTD./6, BOOKSELLERS' ROW, W. C.”

第7巻表紙はほぼ同一。ただし巻数が“Seventh Series.”と書店の住所が“230, STRAND, /LATE BOOKSELLERS' ROWS.”で少し異なる。

第2巻扉に英訳者名を記述している。「オクスフォード大学文学修士R・ウィットリング R. WHITTLING, M. A., Oxon.」である。ただし第7巻では“WHITLING”だ(後述)。

山川篤はこれについて次のように説明する。

[山川93-118] 訳者はどの巻でも扉に、/ Translated from the French by R. Whitting, M. A., Oxon. /と断わってあるから問題ない。オクスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである。しかし刊行年がどの刊にも記されていない。最終の第十一巻でも同様なのである。

気になるのは最終を第11巻にしているところではない。「R.」について「リチャード」をあてた。なにか根拠があるのだろうか。説明はない。

### 3 英訳短篇シリーズの訳者について

「アフター・ディナー・シリーズ」全12巻のうち10巻までの訳者はウィットリングだ。本稿では第10、11巻の訳者は問題にしない\*11。

ウィットリングはいい。ただしその英文綴りに2種類がある。WHITTLING と WHITLING としているものが存在するのだ。確かに細かい。TT と2字を重ねているのが T 1字に変化している。第2巻と第7巻では確かにそう。ほかの典拠は注にまとめておく\*12。

Translated from the French by  
R. WHITTLING, M.A., Oxon.

Translated from the French by  
R. WHITLING, M.A., OXON.

英訳者についていちばん詳細に記載するのは筆者が見た限りで国立国会図書館所蔵目録の表記だ。「Whitling, Robert Charles Storrs」とする。この表記はそれ以外で見かけない。図書館員が独自に調査したと推測する。

ネットで検索すればチェルトナム大学 (CHELTENHAM COLLEGE) の記録に該当する人物が見える。

ロバート・チャールズ・ストーズ・ウィットリング (1844-1898) はオックスフォード大学文学士を経て牧師になった。チェルトナム大学に勤めてもいる (1881-84)。

Rev. Robert Charles Storrs Whitling, B. A. St. John's College, Oxford. B. A. (New Inn Hall) 1871. Curate of Combe St. Nicholas, 1870-75; of Curland, 1871-78. Vicar of Otterford, Somerset, 1875-80. German Master, Military and Civil Department, Cheltenham College, 1881-84. "CHELTENHAM COLLEGE REGISTER 1841-1910", EDITED BY ANDREW ALEXANDER HUNER, LONDON: G. BELL AND SONS, LTD. 1911. p.47 open library 所収

CHARLES HENRY JEFFREYSON, M.A. (56r under 1808).  
REV. ROBERT CHARLES STORRS WHITLING, B.A. St. John's College, Oxford. B.A. (New Inn Hall) 1871. Curate of Combe St. Nicholas, 1870-75; of Curland, 1871-78. Vicar of Otterford, Somerset, 1875-80. German Master, Military and Civil Department, Cheltenham College, 1881-84.  
DORRIS CHARLES WICKHAM, B.A. Educated at Sutton Valence School

「アフター・ディナー・シリーズ」では肩書を「M.A. 文学修士」とする。上の経歴に「ドイツの修士 German Master」とある。同一人物であるならば「B. A. 文学士」のあとに文学修士号を取得したとわかる。

というわけで訳者の姓は“WHITLING”だとする。

#### 4 偽作の混入

「アフター・ディナー・シリーズ」で怪しいのは偽作問題があることだ。

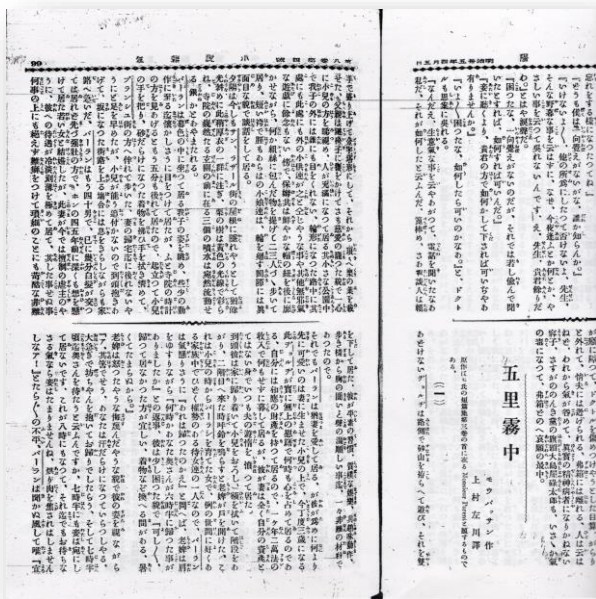
ウィットリングが英訳した10冊のなかに偽作が混入しているとの指摘がある<sup>\*13</sup>。

偽作をモーパッサン作品として日本語翻訳することは正しくない。しかし明治時代にその事実が知られていないのであれば判断のしようもないだろう。偽作をもとにした作家論あるいは作品論は成立しない。簡単な理由だ。これは日訳についての別問題になる。

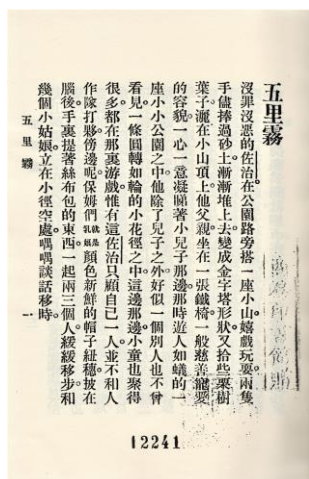
上村左川が使用した英訳は偽作ではない。モーパッサンの「 paran 氏」である。本稿において偽作問題は扱わない。

#### 5 呉禱漢訳と左川日訳

本稿で使用する日訳漢訳のバージョンは次のとおり。底本：モウパッサン作、上村左川訳「五里霧中」『太陽』8巻4-5号1902.4.5-5.5



漢訳：日本上村左川原訳、杭県呉禱重訳『五里霧』上海・商務印書館 丁未 (1907) 年七月初版／中華民国二年十一月三版／中華民国十四年七月五版、袖珍小説 (影印本には奥付なし)



本文は影印本 表紙は孔夫子旧书网より

袖珍小説影印本には奥付がない。その刊年は樽目録によった。

左川の使用した底本について検討した。「アフター・ディナー・シリーズ」の中の1篇であると結論づけた。だが左川は日訳の冒頭においてそう説明しているのだった。

原作はモ氏の短篇集第三巻の首に在る **Monsieur Parent** と題するものである。

「モ氏の短篇集」がまさしくモーパッサン「アフター・ディナー・シリーズ」を指す。「パラン氏」はその第3巻首に収録されている。左川の書いているとおりだ。ただし呉構はこの部分を漢訳していない。

英訳の「パラン氏」を左川は「五里霧中」と訳した。「八方塞がり」と読み替えたわけだ。

「出口なし」としても同じ。

左川日訳「五里霧中(パラン氏)」は「一」と「二」の前後に分かれる。

前半をまとめる。年金で高収入のパランは妻を娶った。しかし金目当ての妻はパランを邪険にあつかう。パランにとって最愛の3歳の息子だけが妻とのいさかいに疲れた自分の慰めだ。ところがパランを育ててくれた家政婦が告げる。妻には愛人がおりパランの息子はその男の子供

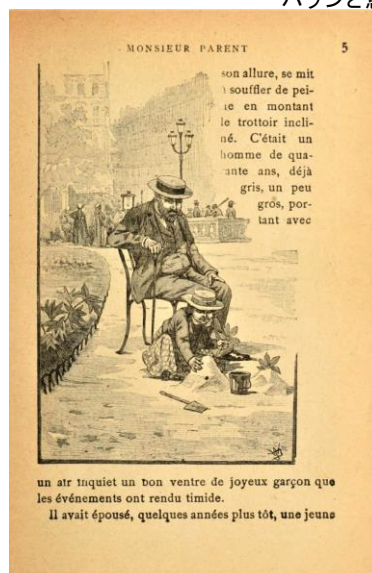
だ。その愛人とはパランにとっては古くからの親友でもあった。妻と愛人が抱擁しているのを目の当たりにしたパランは彼らを追い出した。

後半はこうだ。ひとり残ったパランは再び独身生活をはじめた。息子を想い焦燥と不安に責めさいなまれる。毎日ビヤホールで食事をとり酒に溺れる生活が5年間続いた。散歩していると偶然に妻と愛人および背の高くなった息子を見かけた。さらに数年後、勧められて列車でパリの近郊に気晴らしにでかけた。そのレストランで3人を目撃した。息子は頬ひげをたくわえている。妻と子供に分かれてから23年間にわたって味わいつくした苦痛だった。ついにパランは彼らと対決する時を迎えた。パランはどう反撃するのか。

小説冒頭を比較対照する。日訳漢訳の傍線、日訳のルビは省略した(以下同じ)。

【左川】あどけないジョルジは道側で砂山を拵らへて遊び、それを雙手で盛り上げて金字塔形にして、それから頂へ栗の葉を載せた、父親は鉄椅子に腰をかけてさも慈愛の籠つた貌で一心に小児の方を睥視め、人が充満になつて居る其小さな公園中で我子の外には誰にも目をくれない、98-99頁

パランと息子<sup>\*14</sup>。



【吳禱】没罪没悪の佐治。在公園路旁搭一座小山。喜戲玩耍。両隻手儘捧過砂土。漸漸堆上去。變成金字塔形狀。又拾些栗樹葉子。灑在小山頂上。他父親。坐在一張鉄椅。一般慈善寵愛的容貌。一心一意凝睇著小兒子那邊。那時遊人如蟻的一座小小公園之中。他除了兒子之他。好似一個別人也不會看見。1頁

フランス語原作の「小さい Le petit」が「小さい、かわいい Little」に英訳された。それを左川は「あどけない」に日訳すると吳禱は「無邪気な [没罪没悪的]」に漢訳した。基本は押さえている。日訳「道側で」を吳禱が「公園路旁」と「公園」を補っているのも場所がそうなのだから間違いではない。

ここで吳禱漢訳を日本語に翻訳しないのは左川日訳を直訳しているからである。

40歳のパランはすでに白髪がまじっている。4、5年前に結婚して現在は息子のジョルジュを溺愛している。だが妻はパランを嫌い、なにかにつけてなじるのだった。

【左川】パーランはもう四十男で、已に幾分白髪が交つては居れど先づ強壯の方で、ホンの四五年前に深くも想を懸けて居た女と結婚したが、此妻が今では擅制の虐主のやうに、彼への待遇が冷淡刻薄を極めて居て、其した事せぬ事何事の上にも絶えず難癖をつけて瑣細のことにも苛酷な非難を下して居た、彼が平素の習慣、質樸な娯楽、其趣味動作、歩き様から胸の円いと声の温順しい事迄、一々非難の材料であつたので。99頁

【吳禱】可知巴蘭年以四十。雖略有幾分白髮。幸虧精力很為強壯。四五年前。終和一位思恋以久的少女成婚。不料妻子到得家中。忽變成十分專制的暴虐。待他極為冷淡。又極刻薄。重大緊要的事。倒也罷了。任是極

瑣屑細微。也要向他駁難。務求苛刻。連他平素生來的習慣。質樸的歡娛。行走的模樣。言語的聲音。一切萬種動作。全供他妻子做了駁難憎嫌的材料。2-3頁

「此妻が今では擅制の虐主のやうに」を吳禱は「思いもかけず妻は家に入ると突然に十分專制的な虐主に変わってしまった [不料妻子到得家中。忽變成十分專制的暴虐]」とした。妻の態度変化が激しいことを強調したのだ。言葉を付けくわえて説明がわかりやすくなった。

「其した事せぬ事何事の上にも」は「重大緊急なことならいざ知らず [重大緊要的事。倒也罷了]」と書き換えた。

「胸の円いと」は漢訳では無視した。

以上のいずれも許容範囲内の変更であるといえる。吳禱漢訳はほとんど直訳になっている。誤訳はない。

吳禱は底本の文章一部分を漢訳してあとは省略する(下線は筆者。以下同じ)。パランに注意された家政婦が立腹してドアを乱暴に閉めて出て行った。ジョージがドアの音を真似する個所だ。

【左川】最初は呆れ返つて居たジョルヂは面白さうに手を叩きだして、頬を膨らせながら精一杯大きな息を込めてパーンと戸の閉つた音の真似をした、それから父親は色々のお伽噺を聞かせたが、心中思ふ事があるので断えず噺の筋が間違ひ、訳が解らないので小供は呆れて眼を大きくした。101頁

【吳禱】第一個小小佐治。先自發了呆。11頁

最初ジョルヂはぼかんとしていた。

ジョージの無邪気な所作と父パランの狼狽を対比させて説明している個所だ。その日訳は小説の本筋にとって不必要だと吳禱は判断したら

しい。

家政婦ジュリーは意を決した。主人に向かい女主人の不貞を告げる。

【左川】 イエ旦那、妾はもう何もかも云はねばきゝません、今迄久しいこと奥さんはリムウザンさんと不義をして居るですよ、戸の後ろで幾度も両個が接吻するのを妾は見ました、リムウザンさんに若しお金があつたら、奥さんは屹と貴下と夫婦になりはしなかつたです、何んな工合で結婚しなされることになつたか覚えて居なされるなら、一伍一什の事情が判りませう 102頁

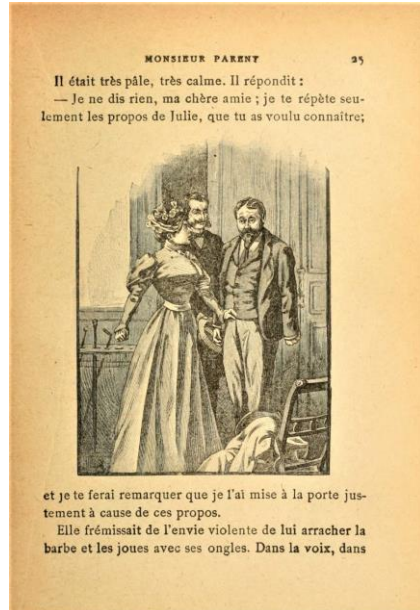
【呉禱】 我如今不論如何。再也不能不説。主婦夫人。和林佑純先生。幹了不仁不義的事。業已多時。不止一日一月了。我在門後。親眼見他兩人。接了好幾回吻。林佑純先生。倘若有錢。夫人断然不和你老結為夫婦。他為了什麼。我是知道著。莫説這些兒。別的任是大小事情。我一五一十全然知覺。須瞞不過我。14頁

私は今どうあろうと言わずにはいられません。奥さんはリムウザンさんと不仁不義のことをしているのですよ。それも長い間、一日一月のことではありません。私はドアの後ろでふたりが幾度も接吻するのをこの眼で見たのです。リムウザンさんにもしお金があつたら奥さんはきっと旦那様とは夫婦にはならなかつたです。あの方が何のためだったのか私は知っております。そればかりかほかのどんな事も私は一部始終をすべて知っていますから隠し通すことはできはしないのです。

家政婦がいう「何んな工合で結婚しなされることになつたか」とは金に引かれて結婚したことを意味する。呉禱は「他為了什麼 [あの方が何のためだったのか]」と理解している。ただし次が異なる。左川は「一伍一什 (いちぶしじ

う)」を使用して「判りませう」とパランに全部の事情を分からせようとした。しかし呉禱は「一五一十」とそのまま漢訳に利用しながら知っている主体を家政婦に取り換えた。細かな部分だ。本筋からは離れていない。

まことに赤裸々な告発である。事実を事実として知らせる。パランには反論のしようがない。彼は逆上して自分を育ててくれた主人思いの家政婦を追い出した。



左から妻アンリエット 愛人リムウザン パラン

息子が他人の子かもしれない。こうしてパランは疑惑と苦悩とに責められることになる。

呉禱は左川をほぼ忠実に漢訳しているが除去する部分もある。下線部分は一致する。しかしそれ以外を呉禱は漢訳しなかつた。そこを「漢訳なし」と示す。

【左川】 毎日時々刻々の間唯此悽しい秘密を発見さうとばかり焦ることであらう、そして無邪気な小兒、嗟其懐かしい小兒をも、此劇しい苦痛で骨髓を抉らるゝ心地せずには最早見ることが得せぬのである、我愛し且は憎むべき其子と共に茲に生活し、此家に留るの外がなからう然うだ結局は此子を



憎むやうになるは必定、嗟何たる苛責！寧そリムウザンが確かに此子の父と極つてしまつたなら、却て心も安らぎ不幸と苦痛にも慣れ得られることであらうが、何方とも判らないのは実に耐へ難き苛責である！判らないで、それを何時も知らうと焦り、断えず煩悶しながら、而も此子、他人の子を時々接吻して伴れて歩いたり、抱いて行つたりして 108頁

【呉禱】他天天時時刻刻。只焦慮縈縈。要想發覺這件凄慘的秘密事情。那天真爛熳的小兒。噯。可憐啊可憐。(漢訳なし) 如果真是別人的兒子。我這時時向他接吻。時時抱著遊行。恰為何來。37頁

彼は毎日時々刻々この凄惨な秘密を發見しようとした絶えず焦るばかりだった。あの無邪気な子供。ああ、可愛いかわいいあの子。(漢訳なし) もし本当に他人の子だったら私が時々接吻したり時々抱いて歩くのはほんとうに何だったのだ。

左川日訳はパランの一人称で思考している。呉禱は三人称に変換して途中で一人称に切り替えた。取り除けた個所の「寧そリムウザンが確かに此子の父と極つてしまつたなら」を引き抜いて「如果真是別人的兒子 [もし本当に他人の子だったら]」に取り入れた。こういう削除操作が漢訳を全体から見れば短縮する結果となる。

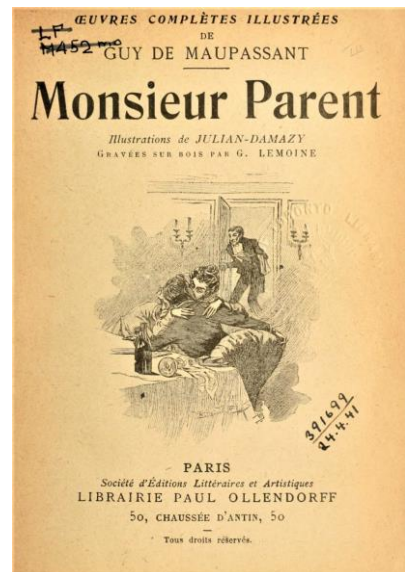
パランは息子についての事実をどうしても認めたくはなかった。しかし決定的出来事がパランの目前で出現していたから自分の誤りを思い知ることになる。家政婦の代わりを探しに行くといつていったん家を出た。しばらくしてパランが戻ってきた。

【左川】姦婦が常の柔しい輕蔑の貌で笑ひながら、男の側に寄り添うて肩に手をかけた、煙突の處の鏡の前であつたので、時計の後にも丁度全じやうな男女が寄り添うて

居る姿が見られた。／此時何とて両側の耳に入るものは無く、鍵の音も戸の開く響も少しも知らなかつたが、アンリエツトは俄に声を揚げて両手でリムウザンを突退けた、見れば前にはパーランが突立て血相變へて此方を睨んで居る、110-111頁

【呉禱】那姦婦發出一股柔情。又帶著輕藐形容。只是憨笑。隨走近男的身旁。將手搭在他肩上。地位正在立鏡之前。時鐘之後。看著好似男女兩人。扭結在一處模樣。／那時心神迷惑。什麼東西。也不入兩人耳裏來。那些開鎖聲音。開門氣息。更是一些不會聽見。不意恩利愛特。忽地揚聲高喊。兩手突然將林佑純一推。離得老遠。慌亂之中。張眼一看。只見巴蘭矗立在面前。臉上變成紫血一般。向這辺睨看。45-46頁

その姦婦は柔らかくて輕蔑の様子で無邪気に笑つて男のそばに近寄ると肩に手をかけた。ちょうど姿鏡の前の場所で時計の後ろにも男女のふたりが絡まっている様子が見られた。／その時、心神は混乱しふたりの耳に入るものはなにもなかった。鍵を開ける音もドアの開く気配さえまったく聞こえなかつたがアンリエツトは不意に声をあげ大きく叫ぶと両手で突然リムウザンを押しのけ遠ざけた。慌てる中、眼を見開いてみればパーランが面前に突っ立って血相を変えてこちらをにらんでいる。



呉禱が除外したのは左川訳にある「煙突の處の」くらいのものだ。呉禱が付けくわえたのは「心神迷惑」だ。それらを除けばほとんど直訳といっていいただろう。

パランはリムーザンに跳びかかる。アンリエットが夫の首をつかむ。大騒動のあとパランはふたりを家から追い出した。

妻は残酷な事実をパランに向けて捨て台詞にする。

【左川】 妾は我子が要りますよ、あなたにはあの子を伴れる権利はない、あなたの胤ではないんだもの……判つたか子あの子はあなたの子ではない、リムウザンさんの子だよ 112頁

【呉禱】 我定要我的兒子。你須沒有帶那孩子的權利。這須不是你的骨血。……你知道麼。那孩子不是你的兒子。乃是林佑純先生的兒子。49頁

本漢訳において呉禱は会話を示すカッコ記号は使用していない。しかし「……」の個所はそのまま漢訳していることがわかる。

ここまでが左川日訳の前半だ。呉禱は前後を分かつたずひとつづきにする。

パランは再び独身生活を始めた。彼を悩ませたのはやはり父親問題だ。ジョルジュの父は本当にリムーザンなのかという疑惑が払拭できずに苦悩し煩悶する毎日だった。

モーパッサンはパランが苦悩する様子を長々と描写する。それが本作品の主題でもある。主人公が23年間の長きにわたって悩み続けることが結末のどんでん返しには必要だからだ。それが彼の小説作法である。

煩悶の具体例を示す。

【左川】 リムウザンが小児に対しての挙動を想出さうと、不愉快で暑つくるしい思いをしながら、床の中で幾度となく寝返を打

つたが、素振と云ひ貌付と云ひ、物の云ひ方寵愛の仕方迄、何一つ疑しいやうなことは能う想出さない、母親の方といへば、これは小児の上はさして頓着して居なかつた位であつた若し密夫の胤であるものなら必らずもつと秘蔵にしたのだらう、して見れば兩個は唯復讐と悪意で、其交情の邪魔をした面当に自分とあの児とを引分けたものであらうと思ひ、翌朝は法官の許を訪ひ其助力を借りてジョルジュを取返さうと覺悟を極めたが、さう決心したかと思ふと復直ぐに反対の方へ考へてしまふ、96-97頁

【呉禱】 巴蘭睡在牀中。幾次三番。輾轉反側。想到後來。除非我和那孩子試驗試驗。纔見分明。(割注：中国是用滴血之法) 明天早晨。且到法官那裏。求他幫忙助力。將佐治奪取回來。剛剛決定心腸。忽又轉了別念。53-54頁

パーランは床の中で幾度となく寝返りを打つたが、あとで私とあの子供を試験してみるほかない、そうしてこそはっきりすると考へ着いた(中国は滴血の法を使用する)。翌朝は法官のところへ行き助けてもらいジョルジュを取り返そう。そう決心したかと思うとすぐに別の考へに変わるのだった。

下線部分が左川日訳と呉禱漢訳がほぼ一致する。呉禱は底本が描写するパランの思考の行きつ戻りつする状況は無視してしまった。そのかわりに中国伝統の「滴血の法」を挿入した。昔の中国では親族であるかないかは血を使用して判別したという。親族を疑われるそれぞれの人物の血を真水に注入する。混じりあえば親族認定がされるという方法だ。伝来の方法を小説に挿入すれば読者には親族問題であるとはっきりと理解できる。そう呉禱は判断したようだ。ここはモーパッサン原作からも左川日訳からも遠く離れてしまった。

呉禱は日本語のカタカナは読むことができる。しかしその意味を理解しないことがある。『車中毒針』では出てくる「モーグ(死体公示所)」を地名「在摩革地方」(15頁)と間違った。それと同じく本作でも「ビーヤホール」(98頁)を「一家大旅館。名叫批亜忽爾」(56頁)と漢訳して大ホテルの名前に取り違えた。あるいは「プラットホーム」(101頁)を地名「泊拉忒忽姆」(68頁)に誤解した。さらには「アンリー四世堂」(102頁)というホテルレストラン名を「恩利地方」(70頁)と地名にした。細かいところだ。

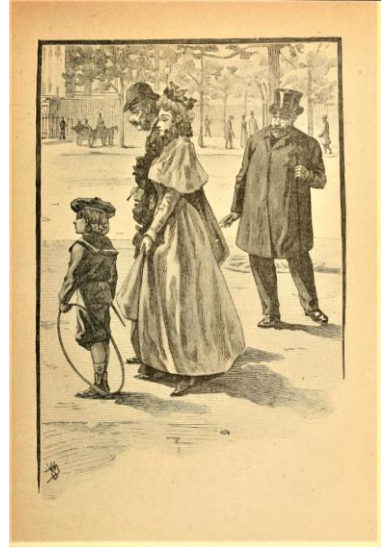
ついでだから呉禱の訳し癖らしきものも書いておく。なぜだが原文のスープをパンに置き換える。

本漢訳において「スープ」(108頁)を呉禱は「麵包[パン]」(35頁)に書き換えた。別作品を見れば日本柳川春葉原著、杭県呉禱訳述『薄命花』(上海・商務印書館 丁未(1907)年六月初版/中華民國六(1917)年四月六版 袖珍小説)がある。ここでも「スープ」(97頁)とする個所を呉禱は「麵包[パン]」(5頁)に変更した。

パランは一日をこのビヤホールで過ごすことになった。毎日、食事をしコーヒー、ブランデーを飲む。途中で散歩をしてまたブランデー、アブシンス(アブサン)を楽しむ。閉店になるまでそこで時間をつぶすのだ。

そうして5年が経過した。ということは3歳のジョルジュは8歳だ。パランは偶然にこの3人を通りで見かけた。その時の様子を描いた挿絵を示す。

溺愛していたジョルジュは背が高くなっている。パランは子供を抱き上げて逃げ出そうと一瞬考えた。偶然にぶつかった様子を装ったがジョルジュからにらまれる(日訳99頁/漢訳61頁)。パランはコソコソと退散するほかない。あれほど愛していた息子は自分のことをまったく知らない他人だと考えている。子供は腹立た



パランは3人を見かけた

しげに睨んだのだ。人間関係が断絶していることを示す。これが数年後に発生する破局の伏線にもなっている。

女性店員に勧められてパランは気晴らしのためパリからサン・ジェルマン(サン=ジェルマン=アン=レーのこと)に行くことにした。汽車で到着すると景色を堪能した。「回想すれば今迄二十ヶ年の間、飲食店で過ごした変化なき無趣味の悲しい歲月！」(101頁)だ。呉禱は記号を含めて逐次訳をしている。「回想従前。那二十年以来。在酒飯館裏。度那没趣没味不生不死的淒涼歲月！」(69頁)である。

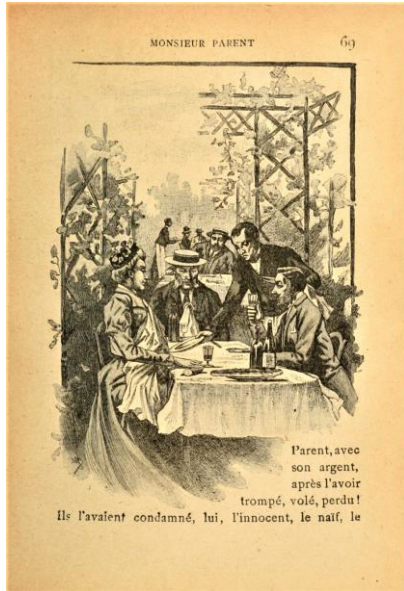
食事をしようとレストランに入る。そばで見知らぬ3人の客が食事をしている。パランはその声を聴いて察知した。アンリエットたちだ。

(挿絵の手前左からアンリエット、リムーザン、給仕、息子のジョルジュ。パランは後ろの正面に座って彼ら3人を凝視している)

パランは回想して怒りを抑えきれない。

【左川】彼等は此質樸単純な陽気な人間を、全く孤独の悲境に陥れ、街道の敷石と酒店の帳場との間のみで忌はしい一生を過させ、精神の苛責、肉体の苦艱、辛酸悲痛のあらん限りを嘗めさせたのである！(大きく中

略) 今其三人の者は直ぐ眼前に並んで居る、  
斯程迄心を悩ませる其三人! 102-103頁



長くなるので途中を略した。その全体は約650字足らずである。これを呉禱はすべて投げ捨てた。とても惜しいと思う。ここで述べる具体的な憤激があってこそ最後にパランが感情的に爆発する衝撃度を強めるからだ。

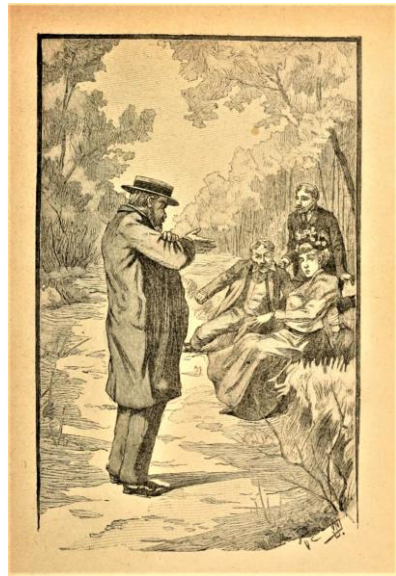
それを指して次の「是迄の苦痛と落胆の数々」でまとめた。そこは左川日記の通りにしている。

【左川】 パーランは是迄の苦痛と落胆の数々を悉く想起して、奮激しながら其様子を睥視したが、103頁

【呉禱】 巴蘭登時把從前的苦痛恐懼。一起一起籠總兜上心来。漲満了一肚子気憤。冷眼看他們模様。72頁

パーランはただちに昔の苦痛と恐怖がひとつひとつぼんやりと混じりあって心がふさがれてしまうと全身に憤激を満ち溢れさせながら冷ややかに彼らの様子をながめた。

パランは食事を終えた3名のあとをつけた。パランは彼らを目の前にして叫んだ。これまでの経緯、自分の名前がアンリ・パランであり息子の名前がジョルジュ・パランであること、ア



パランが暴露する

ンリエットは妻だし、その3人はパランが支給する金で生活していること、妻とリムーザンの関係、妻がパランの金を目当てにして嫁いできたことなどを並べ立てた。

最後はパランによる止めの台詞だ。

【左川】 さア、返事をしろ……嬬は知らない……賭でもしやう、彼奴は知らない……いゝや……何うしたつて知らない……両方へ全衾をして居たんだ! ハ、ハ、ハ……ジョルヂ手前にも知れない、俺から上の事は判らない……何うしたつて判らない……さアその阿母に問うて見ろ……阿母も知らないぞ……俺も知らない……手前が勝手に極めれば可い……然うだ、父親は俺だか彼奴だか、手前が勝手に極めろ……何方とでも極めろ……左様なら……もうこれで済んだ済んだ……此後若し阿母が手前に言て聞かすと云ふことになったら俺に来て知らせろ、コンチナン旅館に居るから……知れたら嬉しい……左様なら……皆さん沢山お楽しみ…… 105-106頁

【呉禱】 快些回答啊。妻子不知道。任是賭賽什麼也好。那厮不知道。……呀。為什麼

不知道。両辺都是共枕同衾。哈哈。誰也不知道。噲。佐治你也不知。為什麼不知。你問問阿母瞧。……阿母也不知。難道俺也不知。你若能幹些便好了。父親究竟是俺啊。還是那厮啊。你通些靈性。任是誰人。也不妨老实講。若是恁地。如今這事又是不了。又是不了。從今以後。若你母親有話告訴你。你須前來告俺。…… 80-81頁

早く答えろ。妻は知らない。賭けてもいいぞ。あいつは知らない。……ヤ、なぜ知らないか。両方と同衾していたんだ。ハハ、誰も知らない。ケ、ヂョルヂ、お前も知らない。なぜ知らないか。お前の母親に聞いてみる。……母親も知らない。俺も知らない。お前がもし決めることができればいいじゃないか。父親は結局のところ俺かそれともあいつか。お前の頭が回れば誰だろうと正直に言ってもいいのだぞ。そういうことだから、この事はもう終わりだ、終わりだ。今後、もし母親がお前に話すことがあるということになったらお前は俺に知らせに来いよ……

呉禱漢訳では「……」の使用が左川よりも控えてある。底本で記号がそのように使用してあるのはパランの喋りを写したものだからだ。激しい怒りをもって考えながら力強く追及する口調を創出した。日訳はそれを忠実に反映している。漢訳は一致はしていない。

左川日訳の「俺から上の事は判らない」というのはわかりにくい。フランス原文は“tu ne le sauras pas, pas plus que moi [お前は知らない、俺以上に]”だ。英訳は“you will not know any more than I do [お前は俺以上のことは知らない]”となる。それを知れば左川の日本語につながる。

日訳の「左様なら」は別れの言葉だ。フランス語原文で“Bonsoir”、英訳で“Good evening”である。「こんばんは」あるいは「お

つかれさん」でもいだろう。ところが呉禱は日本語音と漢字に引かれて「そういうことだから」と理解した。それが漢訳の「若是恁地」に該当する。呉禱が日本語の漢字を勘違いすることは多くはないにしてもあることはある。

以上のところを見れば呉禱は底本の部分をいくらか省略をしながらほぼ忠実に漢訳しているといっている。

ところが最後の最後になって呉禱は勝手に筋を書き換えるのだった。

## 6 重大な改変

パランは3人との対決で大いに疲労を覚えた。パリにもどりいつものビヤホールに向かった。

【左川】(パーランは)生まれてない事、此晩には全く酔ひ頹てしまつて、到頭家へ担ぎ込まれるに至つた。106頁

パランにとってはそれ以後も悔恨と懊悩に襲われる地獄の日々が続くのだ。モーパッサンは残酷なまでにその苦悩をパランに強要する考えだった。

呉禱の書き換えを見る。

【呉禱】誰知他死期已到。当晚酒喝酒喝的過多。就此一醉身亡。只索由館中人将屍首擡到家中。安排殯殮。82頁

彼(パーラン)の死期がすでに来ていたことを誰が知ろうか。その晩、酒を飲みすぎてしまいそのまま死亡した。旅館から人をよこしてもらい死体を家に担ぎ込むと納棺出棺の手配をしたのだった。

パランを死なせてはモーパッサンの残酷さが生きてこない。ここは生き延びさせるべき個所だ。

呉禱は誤判断したというほかない。ほとんど忠実な漢訳であるだけにこの結末の変更は残念

なことだと思う。

重要な箇所を書き改めることがあるのは呉禱の別作品『銀鈕碑』(1907)にも見える。ベーラの亡骸を納める棺桶に銀モールを飾るのが原作だ。呉禱はそれを「銀鈕子〔銀ボタン〕」に変更した。そこから漢訳題名を『銀鈕碑』にするという大胆さだ。レールモントフ作、矢崎訳「当代の露西亜人」からは離れてしまう。呉禱漢訳の登張竹風訳『賣国奴』がある。最後部分に大きく加筆してゾーダーマンの作品世界を破壊したことも書いておく(別稿あり)。

日本語訳を直訳するのが呉禱の基本的な翻訳姿勢だ。しかしそうではない箇所もある。

モーパッサン原作の「パラン氏」は夫と妻、父と子、また愛人との複雑な人間関係問題を赤裸々につづっている。いわば心理小説である。清末の読者にどのように受け止められたのか。それを証明する当時の評論文はなさそうだ。

ひとつの資料になりそうなのは新聞広告だ。出版元の商務印書館が出稿した。次の広告の句読点は陳大康が施したもの。

【編年⑤2574】『中外日報』「上海商務印書館又新出小説九種」光緒三十三年八月二十五日

上海商務印書館光緒三十三年七月出版、

日本上村左川原訳、杭県呉禱重訳／此書叙巴蘭受愚于其妻恩利愛特、後始覺悟、憤激衝突、卒子身以醉死。描摹口吻惟妙惟肖、讀之洵足解頤。袖珍洋装式、售大洋一角五分<sup>15</sup>。

(内容のみを翻訳する)本書はパーランがその妻アンリエットからバカにされ後によく悟り憤激して衝突し最後はひとり酔って死ぬ。描写口調は絶妙で読めば十分に笑うことができる。

描写の巧みな点を前面に押し出して広告した。たしかに呉禱の漢訳はその個所に見せ所がある。ただし笑うことができる作品ではないように思う。商務印書館の広告文書き手とは感覚が異なる。

呉禱は本漢訳でも見事な口語訳を披露している。これが清末という時代に出現しているのに注目すべきだ。同時代の林紘が文言文を用いて翻訳作品を出版しているのと自然に比較したくなるだろう。大多数の漢訳者が文言文を使用していた時代なのだ。呉禱はのちの五四時期前後から提唱される白話に先駆けて口語訳を実践している。無視すべきではない。その側面については評価する価値が大いにありたい。㊦

#### 登場人物名対照表

英 訳	左 川	呉 禱	備 考
Henri Parent アンリ・パラン	アンリー、パーラン	恩利巴蘭	主人公、年金生活者
George Parent ジョルジュ・パラン	ジョルヂ、パーラン	佐治巴蘭	息子
Henriette アンリエット	アンリエット	恩利愛特	妻
Paul Limousin ポール・リムーザン	パウル、リムウザン	巴烏爾林佑純	親友、妻の愛人
Julie ジュリー	ジュリー	仇利	家政婦

#### 【注】

1) 大町桂月(芳衛)「上村左川を弔ふ」『我が文章』日高有倫堂1905.12.25。41-46頁。のち『人間と自

然』東亜堂書房1915.11.27。237-243頁。いずれも国立国会図書館デジタルコレクション所収

2) 李艷麗『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』

- (上海社会学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書)が江見水蔭『自己中心明治文壇史』博文館1927(筆者未見)から引用する(150頁)。博文館の編集者として名前が見える。
- 3) 国立国会図書館デジタルコレクションに収める書籍を引く。  
 上村左川編『時事論説文範』博文館1898.11.22(日付に訂正あり)。奥付編者は上村貞子  
 上村貞子編『新撰日本地理問答』博文館1902.1.26(日付に訂正あり)  
 上村左川編『新撰和英文典問答』博文館1904.10.3(月日に訂正あり)。奥付著者は村上貞子  
 アルフォンス、ドーデー(表紙扉ドオデエ)作、上村左川訳『母の恋』東京国民書院1910.7.15(ALPHONSE DAUDET 原作 JACK 1876。MARY NEAL SHERWOOD 英訳 JACK. 1877)
- 4) 左川訳ドイルは漢訳された。滑震記「(滑震筆記之一 短篇) 黄面」『時報』光緒30.6.23-28(1904.8.4-9)。ARTHUR CONAN DOYLE “THE YELLOW FACE” 1893.2(劉德隆)英文と上村左川訳「再婚」(『太陽』第7巻第13号1901.11.5)を参照して漢訳した。
- 5) 次を参照した。川戸道昭+榊原貴教編「明治翻訳文学全集」新聞雑誌編31、32 大空社1997.10.28、1999.12.3
- 6) つぎのようなものがある。すべて open library 所収  
 『オッド・ナンバー』JONATHAN STURGES 英訳 “THE ODD NUMBER / Thirteen Tales by Guy de Maupassant” NEW YORK: HARPER & BROTHERS, 1889。13篇を収録。Monsieur Parent を含んでいない。  
 1902年以前の刊行でなければならない。ゆえに次の書物は該当しない。  
 GUY DE MAUPASSANT 著、英訳者不記 “THE COMPLETE SHORT STORIES OF GUY DE MAUPASSANT : TEN VOLUMES IN ONE” NEW YORK: P. F. COLLIER & SON CORPORATION, 1903  
 M. WALTER DUNNE 英訳 “THE WORKS OF GUY DE MAUPASSANT” 1903
- 7) 田山花袋『東京の三十年』博文館1917.6.18(日ごとの訂正あり)。国立国会図書館デジタルコレクション所収。また同じく、田山録弥『花袋全集』第11巻 花袋全集刊行会1923.7.24。364頁
- 8) 木村毅「第二編 第十三章 ケンペールとシーボルト 四 モウパッサン」『丸善百年史』上巻1980 ウェブサイト丸善出版
- 9) 山川篤「第四章 「ジ・アフター・ディナー・シリーズ」及びこれをめぐるとの二つの疑問について」『花袋・フローベール・モーパッサン』駿河台出版社1993.5.10。115-134頁。略号は[山川93]。第1-11巻の細目を収録する。11巻完結と考えたから第12巻は未収録。また偽作問題には言及がない。
- 10) 牧義之「英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察：新出第十二巻をめぐって」『北の文庫』42、2005.8 電字版。略号は[牧05]。および牧義之「英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察(承前)：翻訳から見る第十二巻の存在」『北の文庫』47、2008.2 電字版
- 11) 参考までに[牧05-3]は「(第十二巻の)訳者は十一巻と同じハンニガン(D. F. HANNIGAN)である」とする。
- 12) WHITLING 説が正しいだろう。通し番号を振る。  
 ○WHITLING 説――  
 ①英国図書館(British Library) 目録「Short Stories ... Second Series / translated from the French by R. Whitling., London : Mathieson & Co, [1896, 97]」  
 ②同 上「Short Stories : ninth series / tr. from the French by R. Whitling.」Guy de Maupassant, 1850-1893.[S.I.] : Mathieson,[n.d.]  
 ③外国図書館(Georgian Catholic Foundation) 目録「Short stories. Fifth series : Translated from the French by R. Whitling, M.A., Oxon」注：オックスフォード大学文学士  
 ④[山川93-118] Translated from the French by R. Whitling, M. A., Oxon.、オックスフォード大

学修士リチャード・ウィットリングである。118頁。

なお〔牧05-6〕注10が「第一巻から第十巻までの訳者は、オックスフォード大学修士リチャード・ウィットリングである」とするのは〔山川93-118〕から引用したものか。

⑤足立和彦は Robert Whitting とする。足立和彦「メズロワ、リシュパン、ザッハー=マゾッホ——英訳モーパッサン「偽作」の調査報告」大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』第34号 2014.6.25。略号は〔足立14〕

⑥足立ウェブサイト「モーパッサンを巡って」。  
Short stories by Guy de Maupassant, translated from the French by R. Whitting, M.A., Oxon, coll. "After-Dinner Series", London, Mathieson, n. d. 12 vols.

○WHITTLING 説——

⑦『慶應義塾図書館洋書目録』1906「Maupassant, G. de.—Short Stories, translated from the French by R. Whitting, (the after-dinner series), London B 521 1」45頁。googlebooks 所収

- 13) 参考文献は次のとおり。  
大西忠雄「モーパッサン偽作一覧表」日本比較文学学会『日本比較文学會報』12、1958.1  
秋山勇造「モーパッサン」『埋もれた翻訳——近代文学の開拓者たち』新読書社1998.10.20。272-310頁  
前出の足立和彦「メズロワ、リシュパン、ザッハー=マゾッホ——英訳モーパッサン「偽作」の調査報告」2014
- 14) 挿絵はすべて次による。GUY DE MAUPASSANT “MONSIEUR PARENT” PARIS: LIBRAIRIE PAUL OLLENDORFF (1899) open library 所収
- 15) 同様の広告を引用しておく。〔付晚上209-210〕『商務印書館書目提要』1909.九改定7版  
「言情小説 五里霧 一角五分/巴蘭受愚于其妻, 後始覚悟, 憤激衝突, 卒子身以醉死, 描摹口吻惟妙惟肖, 読之洵足解頤」

## 呉構漢訳ドイル「斥候美談」 ——高須梅溪訳「大佐の罪」

樽本照雄

科楠岱爾著、(日)高須梅溪訳意、中国錢塘呉構重演「(軍事小説)斥候美談」上中下である。先走りして説明すればドイル原作は上中下に分けない。梅溪日記がそうしているのを呉構はなぞっただけだ。

『繡像小説』第72期に掲載された。該期の刊年は不記である。それにもかかわらず以前は「丙午三月十五日(1906.4.8)」と記述していた。正確ではない。発行遅延が常態化していたのが事実だ。新聞などの刊行記録を見る。実際の刊行は丙午(1906)十二月だと推定される。

この刊行事実は李伯元の死去(同年三月十四日)に関係する。すなわち李伯元死去後も『繡像小説』は刊行されていた。これは「文明小史」の作者問題に直接つながっている。ただし呉構漢訳とは関係がないから本稿では説明しない。

呉構が使用した底本は次のとおり。コナン・ドイル作、高須梅溪意訳「(軍事小説)大佐の罪(斥候の滑稽談)」(『太陽』10巻10号1904.7.1)である。

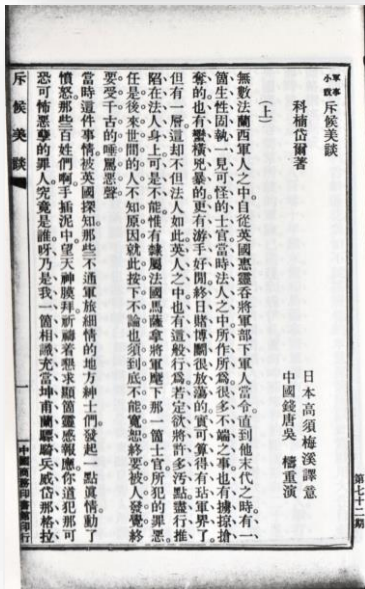
### 1 ドイル原作の経緯——犯罪から狐狩りへ

ドイル(ARTHUR CONAN DOYLE、1859-1930)の原作については中村忠行(1978)の指摘がある。その部分を引用する。





梅溪日記



呉橋漢訳

中村は注意深く記述している。それは「准将が狐を殺した顛末——一名：准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.)と作品名をふたつ掲げているところに見ることができる。前者が「狐」、後者が「犯罪」を使用して題名が異なる。「清末探偵小説史稿」という論文の主題からは対象外だといながら貴重な指摘をした。

ジェラルド准将ものは基本的にふたつの連作で構成される。最初は『ストランド・マガジン THE STRAND MAGAZINE』において1894-95年に連載された。次の連作は同誌1902-03年に公表されている。これがのちにまとめられて2種類の単行本になる。『ジェラルド准将の武勲 THE EXPLOITS OF BRIGADIER GERARD』(GEORGE NEWNES LTD., 1896) および『ジェラルドの冒険 ADVENTURES OF GERARD』(同社、1903)だ\*2。

本稿で紹介する呉橋漢訳(すなわち梅溪日記)のドイル原作には少し複雑な事情がある。

該作の初出はアメリカの雑誌『コスモポリタン THE COSMOPOLITAN』(1899.12)だ。その時の題名は「准将の犯罪 THE CRIME OF THE BRIGADIER」である。雑誌の武勲シリーズと冒険シリーズの連作からはずれて時期的にはその中間に独立して発表された。そのままイギリスの『ストランド・マガジン』(1900.1)に転載後、すぐさま短篇集『緑の旗 THE GREEN FLAG AND OTHER STORIES OF WAR AND SPORT』(1900.3)に収録となった。

複雑なのはその後のことだ。前述のように『ストランド・マガジン』に連載していたジェラルドものを集めて『ジェラルドの冒険』が刊行された。そのとき別の単行本『緑の旗』に収録していた「准将の犯罪」を「准将が狐を殺した顛末 HOW THE BRIGADIER SLEW THE FOX」と改題して冒険の第3話に配列したのだ。同一作品が題名を変えてふたつの短篇集

……訳者は呉橋、高須梅溪訳からの重訳である。原作は、『ジェラルドの冒険』(Adventures of Gerard: Tales of Napoleonic Soldiers, 1904)の第三話「准将が狐を殺した顛末——一名：准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.)、作者自身がジェラルドものの中で一番愛したといふ例の小説である\*1。

に収録されている。ほとんど同時期であるのがおもしろい。

中村は以上の詳細を省き作品名を並記して大要を示したと理解できる。

その経過を知れば梅溪日訳の題名が「大佐の罪」である理由がわかる。すなわち底本としたのは「准将の犯罪」と題した『コスモポリタン』か『ストランド・マガジン』であると考えていい。本稿を書く過程で両者を比較対照した。その結果、単語の使い方にわずかな違いがあることが判明する。梅溪が使用したのは『ストランド・マガジン』の方だ\*3。

高須梅溪(本名芳次郎、1880-1948)は文芸評論家。翻訳にロングフェロー著『乙女の操 EVANGELINE』(新潮社1906.3.18。国立国会図書館デジタルコレクション所収)などがある。

物語の主人公はナポレオンの軽騎兵エティエンヌ・ジェラル(ETIENNE GERARD)という。フランスの軍人に設定してある。ドイルは敵をイギリス軍にした。

大要は次のとおり。スペインにおいてイギリス軍と闘っているときの出来事だ。ジェラルは敵陣地の斥候(偵察、スパイ)を命じられる。彼は敵地に入りこむが見つかり銃弾をあびて馬を失った。偶然に敵の駿馬を奪う機会がありそこを脱出した。ところがその馬のせいでイギリス人が狐狩りを実行している現場に巻き込まれる。敵愾心を燃やしたジェラルが狐を殺してイギリス人を打ち負かした。イギリス人のお株を奪ったからジェラルの「犯罪」というわけ。

brigadier を辞書で見れば准将とある。少将と大佐の中間の位という。梅溪が題名を「大佐」としたのは本文中にジェラルを「大佐 colonel」と呼ぶ場面があるからだろう。そのほうが当時の日本読者には理解しやすかったと思われる。

また梅溪が示した副題は「斥候の滑稽談」であることにも注目する。もともと深刻な戦闘が発生するわけではない。戦場でイギリス軍人が

狐狩りをするという奇想天外な物語だ。しかも狐をめぐるフランス軍人とイギリス軍人の意地の張り合いという滑稽談に仕立ててある。ドイルがフランス人の視線で記述し、しかもイギリス人を打ち負かしたのだからなおさらだ。

## 2 原文、日訳と漢訳

冒頭部分を2分割して比較対照してみよう(ルビ省略。下線筆者。くり返し記号は文字に変換する。以下同じ)。ドイル原文に忠実な笹野日訳を使用する。

### はじめ

【ドイル】 In all the great hosts of France there was only one officer toward whom the English of Wellington's Army retained a deep, steady, and unchangeable hatred. There were plunderers among the French, and men of violence, gamblers, duellists, and roués. All these could be forgiven, for others of their kidney were to be found among the ranks of the English. But one officer of Massena's force had committed a crime which was unspeakable, unheard of, abominable; only to be alluded to with curses late in the evening, when a second bottle had loosened the tongues of men. p.41

【笹野】フランスの大軍の中にイギリスのウェリントン軍が深い、不動、不変の憎しみを持ち続けている将校がただ一人いる。フランス軍の中には略奪者、暴力的な男、ギャンブラー、決闘者、放蕩者がいた。こういう者たちは全員、許されるだろう。なぜなら、同じような連中がイギリス軍の中にも見られるからだ。しかし、マセナ元帥の軍のある将校は言語道断、前代未聞、唾棄すべき罪を犯した。この話をもつぱらの

のしりながら言及されるのは、晩遅く、二  
本目の瓶が将兵の舌をゆるめた時である。

59頁

「准将の犯罪」は第三者の説明から始まる。イギリスの軍人が深く憎んだ前代未聞の罪とはなにか。それをフランス軍将校のひとりが犯したというのだ。読者の興味を強く引きつける書き出しとなっている。イギリス軍人がしらふでは話題にすることもできないほどの侮辱であったことを下線部分が示している。

梅溪日訳は基本的に原文どおりだ。ただし奇妙な方向に翻訳している箇所がある。

【梅溪】数多き仏蘭西の軍人の中で、英国のウエルリントン公部下の軍人に末代迄も、執念深く憎まれた一人の士官があつた。仏人の中には、略奪を為るものもあれば、乱暴狼藉を働くものもある、賭博、決闘、遊蕩三昧等にも耽ける人達もあるが、これは独り仏人の独占と言ふべきものでない、英人の中にも此手合があるから、強めて仏人のみを咎める訳にはゆかぬ、しかし仏のマツサナ將軍の旗下に属する一士官が犯した罪惡は、其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ、実に憎むべき罪惡で、十分呪詛すべき価がある。120頁

くり返すが、酒がまわってからようやく話題にできる。これがドイツ原文だ。イギリス人にとっては酔わずには言及したくない痛恨事を意味する。ところが梅溪はその部分を省略した。不思議なことに下線で示すように「其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ」を加筆した。これでは話題が軍隊内部に留まることになる。つづく部分にイギリス人が知って大いに怒ったというのに矛盾する。それ以外はドイツ原文にほぼ忠実だ。ゆえにそこだけ違和感が生じる。

呉禱漢訳を見る（固有名詞は梅溪訳を使用する）。

【呉禱】無数法蘭西軍人之中。自從英国惠靈吞將軍部下軍人當令。直到他末代之時。有一個生性固執一見可怪の士官。當時法人之中。所作所為。很多不端之事。也有擄掠搶奪的。也有蛮横兇暴的。更有遊手好閑。終日賭博闊很放蕩的。實可算得有玷軍界了。但有一層。這却不但法人如此。英人之中。也有這般行為。若定將許多汚点。盡行推陷在法人身上。可是不能。惟有隸屬法国馬薩拿將軍麾下那一個士官。所犯的罪惡。任是後來世間的人。不知原因。就此按下不論。也須到底不能寬恕。終要被入發覺。終要受千古的唾罵惡声。1丁オ

無数のフランス軍人の中に、英国のウエルリントン將軍部下の軍人の当時から末代にいたるまで、生まれつき意地っ張りで見  
るからに怪しげな士官がひとりいた。当時のフランス人の中には品行が不真面目なものも多かった。掠奪をするものもあれば、乱暴狼藉をするものもいる。さらには仕事嫌いで遊び好き、終日賭博、決闘、遊蕩にふけるものは確かに軍事界を辱めるものだといえる。しかしそれらはフランス人だけがそうだというわけではなく英人の中にもそのようなことがあった。もし多くの汚点をフランス人にだけに押し付けるのはまったくできないことだ。ただフランスのマツサナ將軍麾下のあの士官が犯した罪惡は後の人々がその原因を知らないからここでは論じないにしても、さすがに許すことはできず、結局は人に気づかれてしまい、結局のところ永遠の痛罵と怒りを受けなければならない。

呉禱は梅溪日訳をほぼ忠実に漢訳している。だから梅溪訳では省略してある酒後の罵り話は

漢訳にはない。これはしかたがないだろう。

ただし下線部分の2カ所について梅溪日訳とは少しのズレがある。

前者はウェリントン軍がフランスのひとりの士官について深く憎悪したという原文だ。憎んだのはイギリス人だと確認しておく。そこを梅溪はイギリス人に「執念深く憎まれた」と受け身にして訳した。

呉構はその日本語の受け身型が理解できなかったらしい。「まれた」とひらがな表記だったからだろう。呉構はその漢字だけを拾い「執念深く憎むべき士官」と理解した。それで「有一个生性固执一见可怪的士官(生まれつき意地っ張りで見ると怪しげな士官がひとりいた)」という漢訳になったと思われる。「憎む」「憎まれる」という部分が消失して梅溪日訳とは離れてしまった。

後者は梅溪による改変箇所だ。「其後仮令世間に知れずに済んで了つたとは言ふものゝ」では前後が繋がらないと呉構は判断した。それはいい。ただし呉構が見たのは日訳の「其後」「世間」「知」「言」という日本語漢字だ。それらを組み合わせて独自に「任是後來世間的人。不知原因。就此按下不論(後の人々がその原因を知らないからここでは論じないにしても)」と書き換えた。もとの日訳がおかしなものだからそれに手を入れても正しい漢訳にはならない。つづく部分だ。

【ドイル】The news of it was carried back to England, and country gentlemen who knew little of the details of the war grew crimson with passion when they heard of it, and yeomen of the shires raised freckled fists to Heaven and swore. And yet who should be the doer of this dreadful deed but our friend the Brigadier, Etienne Gerard, of the Hussars of Conflans, gay-riding, plume-tossing, debonair, the

darling of the ladies and of the six brigades of light cavalry. p.41

【笹野】このニュースがイギリスに持ち帰られると、戦争の詳細についてほとんど知らない田舎紳士たちはこれを聞いた時、怒りで顔を赤らめ、イングランド中部地方の自由農民たちはそばかすだらけの拳を天に振り上げて、ののしった。しかし、この恐るべき所業をやらかしたのは、我らが友、コンフラン軽騎兵連隊のエティエンヌ・ジェラルド准将、派手に馬を乗りこなし、羽飾りを翻し、礼節に厚く、淑女及び軽騎兵六個旅団の寵児だった。59頁

ドイルが「the shires (イングランド中部地方)」をさりげなく出しているのには意味がある。そこは狐狩りで有名な地方だ。特に該地の農民が怒りを爆発させた。物語の「犯罪」が狐狩りに関連するという伏線を張った。

【梅溪】当時、其事実が英国に知れた時は、軍旅の細事に通じて居ない地方紳士等は、真赤に為つて腹を立て、百姓等は、泥だらけな手で、神を拜して、何卒此報酬を思ひ知らせ給へと祈つた位であつた。しかし此恐ろしい罪惡を犯して[た]曲者は誰あらう吾友コンフランの驃騎兵エテイ子、ゲルラド大佐である、大佐は、嫺雅な優しい好騎手の一人で、六旅団の軽騎兵を初めとして、一般の貴婦人にも可愛がられて居る、此様な人物が一大罪を犯したとは、不思議！不思議！ 120頁

「イングランド中部地方」を省略し「freckled fists (そばかすだらけの拳)」を「泥だらけな手」と訳した。また原文にはない下線部分の「此様な人物が一大罪を犯したとは、不思議！不思議！」を挿入する。厳密な翻訳ではなく署名に「意識」と示す通りの意識になっている。

呉禱漢訳はどうか。説明のため日本語訳には梅溪の用語を使った単語にカッコを施した。

【呉禱】當時這件事情。被英国探知。那些不通軍旅細情的地方紳士們。發起一点真情。動了憤怒。那些百姓們啊。手挿泥中。望天神膜拜。祈禱着懇求顯箇靈感報応。你道犯那可恐可怖惡孽的罪人。究竟是誰。呀乃是我一箇相識充當坤甫蘭驃騎兵威岱那格拉特大佐。大佐在驃騎兵營裏。体格嫺雅。馬技高強。衆人本称他是一箇好騎手。自從六箇旅团的輕騎兵為始。以及一班貴族家婦女。莫不箇箇愛敬於他。那樣一等好人物。犯出那般大罪。真是不可思議！不可思議！ 1  
丁オウ

当時この事実が英国に知られると「軍旅」の細事に通じない地方紳士たちは真情を發揮して激しく怒り、「百姓」たちは手を泥の中に突っ込んで天の神にひれ伏し、靈驗あらたかに報いたまえと祈禱したのである。あの恐ろしい罪を犯した罪人は誰であろうか。ああ、すなわち我が友コンフランの驃騎兵エテイ子ゲルラド大佐である。大佐は驃騎兵の兵營では体格「嫺雅」にして馬術の技量が優れており、周囲の人々は好騎手であると称えている。六旅団の輕騎兵を初めとして貴族の婦人も敬愛しないものはない。このような好人物があのような大罪を犯したとは、まことに不思議！不思議！

呉禱漢訳は梅溪日訳の省略誤訳加筆をほぼ反映している。

「嫺雅な優しい」は立ち居振る舞いを指す。呉禱はどうしても対句風に「体格嫺雅。馬技高強」としたくなるらしい。ただし「举止嫺雅」は見かけるが、身体を指す「体格」と嫺雅が結びつかない。

ここの呉禱漢訳には梅溪の日本語訳からそのまま流用する単語がいくつかある。呉禱はそれ

でかまわないと判断したようだ。たとえば「軍旅」という漢語は「軍隊」を意味する。しかし梅溪は「いくさ」とルビを振る。そうならば漢訳して「戦争」とするのが妥当だ。また日本語の「百姓」は漢語では「国民」という意味である。「農民」と漢訳すれば誤解がない。いずれも些細なことで当時の読者は気にしなかったと思う。

以上を見ればドイル原文の冒頭部分に呉禱漢訳の特徴が凝縮されている。

呉禱は白話を使用して日本語訳に忠実に漢訳をする。これが基本姿勢だ。ただし日本語ひらがな、あるいはカタカナについては時たま理解が及ばないばあいが生じる\*4。また前述のように日本漢字に引かれて読み間違ふこともある。

呉禱が独自に判断して省略する箇所があることも指摘しておく。

## 斥候となる

1810年のこと。マセナ軍はウェリントン軍を押し戻しタホ川に追い落とせると思った。ところが防御線を築かれていたため封鎖する以外に方法がなかった。ジェラルドは馬の世話をしながら地元のワインを楽しんで時間を過ごす。それだけでないことをドイルは示唆する。ジェラルドの自分語りである。

【ドイル】 There was a lady at Santarem—but my lips are sealed. It is the part of a gallant man to say nothing, though he may indicate that he could say a great deal.  
p.41

【笹野】 サンタレムにある女性がいた——しかし、わたしの口は封じられている。そういうことについて何も言わないのが勇者のたしなみだ。ただし、言おうと思えば大いに言えるとほのめかしておくのはよい。

60-61頁

前半はジェラルルの言葉だ。後半の「たしなみ」と「ほのめかし」の部分はドイルが口をはさんで注釈したとわかる。

次に示す梅溪はそれを理解してカッコを使用して区別し脚色を加えた。ドイル原文に忠実であるとは言えない。呉禱漢訳も併記して引用する。

【梅溪】サンタラムと言ふ處には、美人が居つたが、それは別に述べる必要もなからう、(実は、何も言はないのが色男の常で、実を言へば、大ありなのであらう。) 121頁

【呉禱】有一處地名三塔關。很多嬌麗美人。那都是閑話。2丁オウ

サンタラムという處には多くの好ましい美人がいたが、それは言うほどのことではない。

ドイル原文では女性はひとりだ。特別な存在であることが匂わせてある。だが梅溪はそれを普通名詞にした。というよりも単数であることを強調しなかった。日本語では「美人たち」とわざわざ書かなければ単数であることもあるからだ。そこから呉禱は美人を複数にふくらませた。梅溪日訳を経て微妙に変化させた個所だ。

ドイル原文を見ているから梅溪日訳の不足が判明する。梅溪日訳だけによっている呉禱が取り違えをするのは避けられない。

もうひとつは梅溪の下線部である。漢訳をする必要がないと呉禱は考えた。ドイル原文から離れた日訳だから呉禱の処理は結果として間違っているではない。

主人公のフランス士官ジェラルルは恐れを知らない勇猛果敢な人物だ。だからこそマゼナ元帥に斥候を命じられた時、心中に不満を感じた。騎兵隊の大佐がやる任務ではないと思ったからだ。

ところが梅溪の日訳を経た呉禱漢訳で彼は臆

病者にされてしまう。主人公ジェラルルの印象が変わってしまう勘違いである。

【ドイル】 His words turned me cold. p.42

【笹野】元帥の言葉にわたしはがっかりした。62頁

【梅溪】何等危険の業ぞ！。將軍の命令は、自分の肝を寒からしめた。121頁

【呉禱】噎。這是何等危険可怕的事！將軍只一箇將令。就把俺の肝胆嚇得粉樣碎冰樣寒。3丁オ

おお、これはなんと危険で恐ろしいことだ！將軍のただ1片の軍令が私の肝を粉碎するほど驚かせ砕けた氷のように寒からしめた。

ドイル原文の“turned me cold”の意味は「自分をぞっとさせた」または「気乗りしない」だ。笹野の翻訳「わたしはがっかりした」が適切だろう。斥候という簡単な任務は自分にはまったくふさわしくないと不服だからである。

梅溪は「何等危険の業ぞ！」と加筆して反語にした。つづけて「自分の肝を寒からしめた」という意味は「がっかりさせた」となる。だからこそ「閣下、御言葉ではござりまするが、輕騎兵の大佐に斥候の役目を仰せつけられまして、無益でございませう。(“Sir,” said I, “it is impossible that a colonel of light cavalry should condescend to act as a spy.” p.42)」となる。梅溪日訳はこれで筋が通っている。

ところが呉禱は反語表現が理解できなかったらしい。日本語の「何等」を見て漢語と同じに「なんという」の意味だと考えた。あとは漢字と記号の「危険」「業」「！」だけを手がかりにして出てきたのが彼の感嘆文である。さらに梅溪日訳の「自分の肝を寒からしめた」を増幅させて漢訳し誤解の傷口を広げたのだった。

つづくジェラルルの反論は、呉禱がいくら梅溪日訳に忠実に漢訳してもただの言い訳にしか

見えなくなる。

### イギリスの駿馬

マセナ元帥はジェラルドに軍中で最も速い名馬を見せた。彼はその馬に乗ることの方に惹かれてひとりで斥候に出発する。もともとジェラルドは女と馬のこと以外は何も考えない (with never a thought beyond women and horses.

“HOW THE BRIGADIER SLEW THE BROTHERS OF AJACCIO”) 人物として設定されている。その馬好きが「大佐の罪」では重要な役割りをになっている。馬と狐狩りが結びつくのだ。

敵の防御線奥深くに入り込んだところでジェラルドはイギリス軍に見つかってしまった。一斉射撃を背にして名馬を走らせた。逃げ切ったと思ったところで馬は突然倒れてしまう。敵弾が胴体を貫いていたのだ。馬を失った軽騎兵にはなすすべがない。ジェラルドは捕虜になることまで覚悟した。幸いイギリス軍高級士官が宿泊する場所の馬小屋に身を隠すことができた。ジェラルドがそこで確認したのはイギリス軍の驚くべき行動だった。イギリスから多くの狐狩り用の犬を取り寄せ、週に3日も狐狩りをやっていたのだ。

ジェラルドはイギリスの狩猟馬を見た。本作では2度の馬描写がある。ジェラルドが乗っていたフランスの名馬が最初だ。2度目がこのイギリス産である。そこを引用する。

【ドイル】—and, oh, my friends, you have never known the perfection to which a horse can attain until you have seen a first-class English hunter. He was superb: tall, broad, strong, and yet as graceful and agile as a deer. Coal black he was in colour, and his neck, and his shoulder, and his quarters, and his fetlocks—how can I describe him all to you? The sun shone

upon him as on polished ebony, and he raised his hoofs in a little, playful dance so lightly and prettily, while he tossed his mane and whinnied with impatience. Never have I seen such a mixture of strength and beauty and grace. p.46

【笹野】——ああ、諸君、第一級のイギリス産狩猟馬を見るまで、馬がどれほどの完成度に達するか分からない。その雄馬は最高だった。背が高く、肩幅は広く、筋骨たくましく、それでいて鹿のように優美でしなやかだった。色は漆黒で、首、肩、腰、蹴爪突起——どうすれば彼のすべてを諸君に説明できようか？ 太陽は磨かれた黒檀を照らすように彼を照らし、彼はちょっとふざけて踊るように軽々と蹄を上げ、その間もたてがみを揺すり、もどかしそうにいないた。これほどまでこのような強さと美しさと優雅さが混じったものを見たことがない。69-70頁

「蹴爪突起 fetlock」とは辞書によると「蹄の上部後方の関節、突起」だそうだ。別に「球節」とも。

ジェラルドが語る狩猟馬賛美は詳細だ。それでも足らず「どうすれば彼のすべてを諸君に説明できようか？」という。それは同時に作者ドイルの気持ちの描写でもある。馬の状態を彼がどれだけ歓喜に包まれ愉快地に書き記しているかがわかる箇所だ。梅溪日訳を次に見る。

【梅溪】英国最上等の獵馬を見ない中は、一寸何んなものか分からないであらう、今曳いて来た馬を見ると、唯に美しいのみではない、背も高く幅も広く、強健で而かも優美で、其快捷なること、さながら鹿のやうである、毛色は漆黒、其頸、其肩、其両足、其距毛、何と言ふ完全な出来工合であらう。日光が當ると、其毛は黒檀のやうに光つて、

蹄を上げる時には、恰度道化踊のやうに軽快無比の處が見える、更らに鬣を振つて嘶くと、実に勇ましい、壮快だ、自分は曾て是位『美しさ』と『強さ』とが具合よく調和したのを見たことがない、125頁

「其距毛(そのひづめのけ)」の「距」は「蹠(けずめ)」と同じ。部位は前述の「蹄の上部後方の関節、突起」にあたる。この梅溪日訳はほとんど直訳といつていい。呉構はそれをどう漢訳したか。

【呉構】俺素来不曾見英国上等獵馬。起先不知是怎樣東西。及至看見這匹馬。不但風神美妙。而且背脊又高。肩幅又闊。又強健。又美觀。駛走的快捷。簡直和鹿相似。毛色漆黑。頸啊肩啊兩足啊蹠(蹄)毛啊。沒一件不是完完全全。天生成功的。映在太陽光之下。毛片似黑檀般膩而有光。举起蹠來。恰好如翻鈸一般。輕快無比。更振鬣一嘶。真箇驍悍。真個英壯。俺出生出世。也不曾見這等美到極處健到極處天生成體魄調和的馬。7丁ウ

自分は英国の上等な狩獵馬を今まで見たことがなかったから、初めはどんなものかは分からなかった。その馬を見るに及んで風貌は美しいだけではなく、背は高く、肩幅は広く、強健でしかも優美で、走りは快捷にして、さながら鹿のようである。毛色は漆黒、その頸、その肩、その両足、その蹄の毛、ひとつとして完全でないものはなく天然の成功物だ。日光が当たるとその毛は黒檀のようになめらかに光って蹄を上げるとちょうど(打楽器の)ハツを翻すように軽快無比である。さらにたてがみを振っていないと、実に勇猛で、実に勇壯だ。自分は生まれてこのかた、これらの美しさが極点に達し、強さが極点に達して身体と精神が調和した馬を見たことがない。

馬が蹄を上げる動作が軽快である様態をドイツは「ちょっとふざけて踊るように in a little, playful dance」と表現する。それを梅溪は「道化踊のやうに軽快無比の處」と翻訳した。「ふざけて踊る」が「道化踊のやうに」になったわけだ。「playful ふざけて」が「道化」に、「dance 踊る」が「踊」に該当する。

呉構は「道化」を意味する漢語の「小丑」を使用してはその動きを伝えられないと思ったらしい。「翻鈸(ハツを翻す)」にした。「鈸」とはシンバル様の打楽器。鐃(によ)鉢などもいう。馬が蹄を高くあげる動作をシンバルを軽々と上方にひるがえす様子に置き換えた。「道化踊のやうに」を直訳はしなかった。読者が理解しないことを危惧したと思われる。あえて意識してシンバルを出すことで読者の了解を優先したとわかる。なにがなんでも直訳を押し通すのではない。題材によって柔軟に漢訳するその姿勢がよい。

呉構はドイツ原作を知らない。しかし梅溪日訳を経由してドイツに近づいたといつていい。呉構漢訳にはこういう鋭い個所があるから少しの誤解を埋め合わせることができる。

上の個所は梅溪の日本語をほぼ直訳したといえる。駿馬についての説明だとわかっている。しかも日本語漢字をそのまま流用することができたのがその要因だ。

### 狐狩り

ジェラルルが乗った駿馬は遠方の掛け声に反応した。狐を駆り立てる「yoy/ヨーイ/ワーイ/嘩伊」(ドイツ/笹野/梅溪/呉構の順)という音声を聞いて狩獵馬は反射的に正気を失ったのだ。谷間に狐を追って多数の獵犬が各種軍人とうごめいている。騎手ジェラルルを無視して馬はその大集団の中に突っ走って行った。イギリス人は自分たちがやっている狐狩りにまさかフランス人が紛れ込んでくるとは思いもし



ない。そこがジェラルムにとっては危険でありながら滑稽でもある。

先行するイギリス騎兵を追い抜いてジェラルムはついに先頭を走った。イギリス人を打ち負かした快感と誇りに酔いながらサーベルを握り狐を狙う。

調べるとこの伝統的狩りの目的は狐を追い回すこと自体を楽しむことだ。最終的に狐は猟犬に食い殺される。しかしドイル原文では次に示すようにジェラルムがサーベルで狐を胴切りして終わる。狐が猟犬に殺されてはジェラルムの出番がない。ドイルが主人公のフランス人を目立たせるために工夫したのだろうと考える。

何度かサーベルが空を切った結果ようやく狐を仕留める瞬間を引用する。

moment of my triumph arrived. In the very act of turning I caught him fair with such another back-handed cut as that with which I killed the aide-de-camp of the Emperor of Russia. He flew into two pieces, his head one way and his tail another. I looked back and waved the blood-stained sabre in the air. For the moment I was exalted-superb! 49p.

【笹野】それからついに勝利の最後の瞬間が来た。向きを変えている最中にキツネを逆手切りでまともに攻撃した。これはロシア皇帝の副官を殺した時の逆手切りだった。キツネは二つになって飛んだ、頭はあつちに、尾はこっちに。わたしは振り返り、血まみれのサーベルを宙に振った。その瞬間わたしは有頂天——最高だった！ 75頁

「副官 aide-de-camp」はフランス語だという解説もある。筆者が注目するのは最後部分の「わたしは有頂天——最高だった！ I was exalted-superb!」だ。狐狩りを得意とするイギリス人を打ち負かしたという自信があふれている。「有頂天——最高」と畳みかけた。

梅溪の日本語訳はその個所だけが少し違う。

【梅溪】しかし自分が最後の勝利を得る時は来た。自分は曾て一刀の下に露帝の副官を切り下げた時のやうに、身をかはして、返へし撃ちに切下すと、見事、狐の体は両断されて、胴と首とは離れ離れに為つて飛んだ、吾は後方を顧みて、鮮血滴る剣を空中に振った、この一瞬間、自分は天上天下唯我独尊！。128頁

日本語訳はドイル原文と同じだと言っている。ただ「有頂天——最高だった」を「天上天下唯我独尊！」とした。突然、釈迦の伝説を織り込んだことになる。ここは一般に流布する意味、

THE CRIME OF THE BRIGADIER.

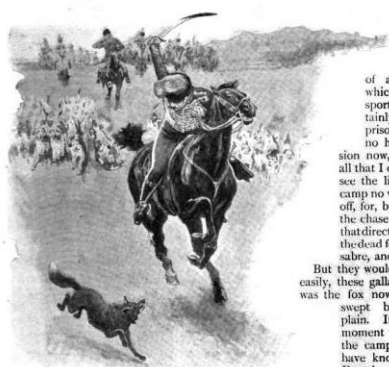
49

France. I had brought honour to each and all. Every instant brought me nearer to the fox. The moment for action had arrived, so I unsheathed my sabre. I waved it in the air, and the brave English all shouted behind me. Only then did I understand how difficult is this fox chase, for one may cut again and again at the creature and never strike him once. He is small, and turns quickly from a blow. At every cut I heard those shouts of encouragement from behind me, and they spurred me to yet another effort. And then at last the supreme moment of my triumph arrived. In the very act of turning I caught

Ah! how I should have loved to have waited to have received the congratulations of these generous enemies. There were fifty of them in sight, and not one who was not waving his hand and shouting. They are not really such a phlegmatic race, the English. A gallant deed in war or in sport will always warm their hearts. As to the old huntsman, he was the nearest to me, and I could see with my own eyes how overcome he was by what he had seen. He was like a man paralyzed, his mouth open, his hand, with outspread fingers, raised in the air. For a moment my inclination was to

return and to embrace him. But already the call of duty was sounding in my ears, and these English, in spite of all the fraternity which exists among sportsmen, would certainly have made me prisoner. There was no hope for my mission now, and I had done all that I could do. I could see the lines of Massena's camp no very great distance off, for, by a lucky chance, the chase had taken us in that direction. I turned from the dead fox, saluted with my sabre, and galloped away.

But they would not leave me so easily, these gallant huntsmen. I was the fox now, and the chase swept bravely over the plain. It was only at the moment when I started for the camp that they could have known that I was a Frenchman, and now the whole swarm of them were at my heels. We were within gunshot of our pickets before they would halt, and then they stood in knots and would not go away, but shouted and waved their hands at me. No, I will not think that it was in enmity. Rather would I fancy that a glow of admiration filled their breasts, and that their one desire was to embrace the stranger who had carried himself so gallantly and well.



"AT EVERY CUT I HEARD SHOUTS BEHIND ME."

him fair with such another back-handed cut as that with which I killed the aide-de-camp of the Emperor of Russia. He flew into two pieces, his head one way and his tail another. I looked back and waved the blood-stained sabre in the air. For the moment I was exalted-superb!

雑誌から 馬と狐

【ドイル】 And then at last the supreme

つまり「自分だけがすばらしい、うぬぼれる」だ。梅溪にしてみれば「有頂天——最高」はその慣用句を適用するのがよいと考えた。強調表現をしたかった。そこを呉禱はどう漢訳したか。

【呉禱】最後の勝局。已在眼前。俺就更使出生平本領。好似從前一刀之下。斬殺俄羅斯皇帝的副官時候一般。扭軀身體。向後一擊。趁勢斬了下去。好啊。有趣啊。那狐身早則化為兩段。身體和頭顱。分離兩下。兀自飛得老遠。俺當即迴顧後邊。將鮮血淋漓流滴的寶劍。搖擺空中。這一剎那之間。俺覺得天上天下。惟我獨尊！ 11丁オ

最後の勝機が目前にあった。自分はすかさず生来の本領を發揮し、曾て一刀のもとにロシア皇帝の副官を斬殺したように、振り向きざま後方に一撃して勢いに乗じてそのまま切り下すと、見事、いいぞ、狐の身体は早くも両断されて、胴と首とはふたつに分離してそのまま遠くに飛んでいった。自分は後方を顧みて、鮮血滴る剣を空中に振った。この一瞬間、自分は天上天下唯我獨尊だと感じた！

呉禱は「天上天下唯我獨尊」そのまま流用して違和感を持たなかった。梅溪日訳を直訳していることが明らかだ。

ジェラルルが自分で満足したのはほんの一瞬だった。フランス人と知られたから今度は彼自身が狐となってイギリス人から追跡される。狐を追った結果に自分が狐になる。自然な流れだ。

【ドイツ】 But they would not leave me so easily, these gallant huntsmen. I was the fox now, and the chase swept bravely over the plain. p.49

【笹野】しかし、彼らは、この勇敢な狩猟家たちは、そう簡単にわたしを放っておかなかった。今度はわたしがキツネで、追跡

が平地で勇ましく展開した。76頁

【梅溪】併し敵の騎兵等は、其儘自分を見逃さなかつた。狐の代りに、今度は自分を獲物的として、平原の中で狩を初めた、129頁

梅溪はドイツ原文のとおり日訳している。呉禱はどうか。

【呉禱】但敵軍騎兵們。並不見俺是逃亡。總道俺棄了群狐。另往別處平原。找那些好打的東西狩獵。 11丁オ

しかし敵軍の騎兵たちは私が逃亡したとはまったく気づかず、私が狐群を捨て別の平原に狩猟の獲物を探しに行ったと考えた。

呉禱漢訳は梅溪日訳のままではない。勘違いしている。どうやら梅溪の文章に見える「見」「逃」「なかつた」を独自に組み合わせて漢訳した。それが「私が逃亡したとはまったく気づかず（並不見俺是逃亡）」である。上の漢訳ではジェラルル自身が標的の狐そのものにされたことがわからない。日訳の意味から離れたのは残念なことだ。

梅溪はドイツ原文にない終わり方をさせている。

【梅溪】以上は大佐の直話であるが、英人が渠を敵視したのは無理がない、これその復讐に熱中する由来の一条。129頁

【呉禱】以上乃是大佐自己的話。英人將他做讐敵看待。自在情理之中。這也是彼此復讐切恨の一箇原故了。11丁ウ

以上は大佐の直話であるが、英人が彼を敵視したのは無理がない。これが互いにひどく復讐しあう由来のひとつだ。

梅溪日訳の最後部分を呉禱は直訳してジェラルル物語は終了した。 罫

【注】

1) 中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(1)」『清末小説研究』第2号 1978.10.31。19頁

2) 次を参照した。

【参考文献】

ウェブサイト the arthur conan doyle encyclopedia 所収の『ストランド・マガジン』から本文を参照した。略称 [ドイル]

コナン・ドイル著、笹野史隆訳『ジェラルール准将の武勲』コナン・ドイル小説全集第47巻 笹野史隆発行2018.4.30

コナン・ドイル著、笹野史隆訳『ジェラルールの冒険』コナン・ドイル小説全集第48、49巻 笹野史隆発行2018.11.30。略称 [笹野]

3) 並記する。『コスモポリタン』において軽騎兵のジェラルールが自分の身分を称して「軽歩兵の大佐」と間違ふのはおかしい。

『コスモポリタン』“a Colonel of Light Infantry” p.172 「軽歩兵の大佐」

『ストランド・マガジン』“a colonel of light cavalry” p.42 「軽騎兵の大佐」

4) カタカナについて小さな誤解があることを3例指摘しておく。

梅溪「一遍グルトと敵陣を廻つて」122頁という箇所だ。「グルト」はいうまでもなく日本語の「ぐるっと」でうしろの「廻つて」とつながる。呉禱は「將敵陣四周。約摸一格爾特之地。環繞一週(敵陣の四周、あのグルトという地をひと回り偵察して)」3丁とす。地名だと思ひ違ひした。

「a slow fox (足の遅いキツネ)」p.45 を梅溪は「ノロ狐」125頁と訳した。ここの「ノロ」は足が遅いという意味。呉禱は「驢(ノロ、ノロジカ)」7丁と誤解した。

狐を追う軍人が速度の違いによりまとまらず拡散してしまった。その状況を梅溪は「チリヂリバラバラに為つて」127頁とする。このカタカナが呉禱にはわからない。擬音だと考えた。「只聽得剔剔歷剔歷撲撲喇撲喇之声(チリヂリバラバラという音を聴いただけで)」10丁オ

“佚失”的《虚无党俄国皇帝》下篇

——陈景韩译*Strange Tales of a Nihilist*发表始末

梁 艳

晚清时期，陈景韩以热心翻译虚无党小说而著称<sup>1</sup>。他以松居松叶译《虚無党奇談》（警醒社書店1904.9）为底本翻译的威廉·图弗内尔·勒奎克斯(William Tufnell Le Queux, 1864-1927)的小说*Strange Tales of a Nihilist*，是跨越英-日-中三种语言文化进行转译的典型。松居松叶译《虚無党奇談》由六章构成，是从1892年版*Strange Tales of a Nihilist*的12个章节中选译的。陈景韩翻译了《虚無党奇談》的全部六章内容，跨越5年(1904-1909)之久才将译文刊载完毕。其中，第三章「わが友伯爵夫人」(原作: III. My Friend, The Princess)更是历经了他的三次翻译、发表，才得以完整呈现。其曲折复杂的转译过程，以及陈景韩对这部小说钟爱有加、锲而不舍的译介动机等，引发了学界的浓厚兴趣<sup>2</sup>。

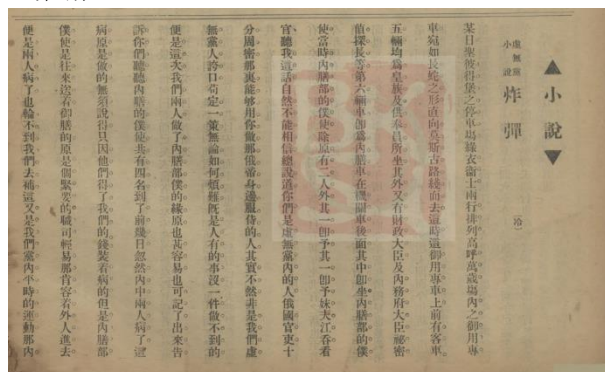
然而，陈景韩对该小说第五章「人民を賣る犬」(原作: VIII. An Imperial Sugar Plum)的翻译，仍有一些未解之谜。詹宜颖指出：“第五章陈冷血译为《俄国皇帝》，也仅刊载了(上篇)、(中篇)，而未见(下篇)，或是由于《月月小说》于1908年12月停刊之故。”<sup>3</sup>那么，《俄国皇帝》的下篇到底有没有翻译发表？其原因又是什么？本文将以前发现的史料为基础，对此进行阐释。

## 一、“佚失”的《虚无党俄国皇帝》下篇：《虚无党炸弹》

松居松叶译《虚無党奇談》第五章「人民を賣る犬」的开篇通过主人公“我”（浦出見・信露好（うらでみるのぶろすき一））之口，痛斥俄国政府残暴腐败，置人民于水火而不顾；颂扬虚无党人不畏艰难困苦、不惜流血牺牲救国救民。紧接着，转入故事正题：虚无党组织得知俄国皇帝、皇后即将离开冬宫乘坐列车出游的消息后，经过周密策划，指派主人公“我”前往执行暗杀任务。“我”从伦敦返回圣彼得堡，巧遇妹妹增香（ますか）和妹夫药学士江番・龍須哲（えばりゅうすてつく）。大家叙旧言欢之际，巡警突然来搜查。“我”冒着疾风暴雨从窗子逃出，躲在屋檐下，避过一劫。后来，“我”与妹夫假扮成御膳房的仆人混进俄国皇帝出游的列车，将一枚包装成砂糖块的炸弹安置在餐车上。不料，一位仆人以为是真的砂糖，削去一角献给皇帝、皇后食用。炸弹的机关因此遭到破坏，十五分钟内即将爆炸。紧急关头，“我”和妹夫从火车上纵身跳下。在虚无党支部同胞的援助下，“我”和妹夫乔装成农民得以脱身，辗转回到了伦敦。通过新闻报道得知，炸弹虽然炸毁了御用列车，炸死了19名随从，但是俄国皇帝和皇后幸免于难。陈景韩先是将「人民を賣る犬」译为《虚无党俄国皇帝》，分“上编”和“中编”，连载在《月月小说》第19号（2年7期，1908年8月）和第21号（2年9期，1908年10月）上。“上编”从痛斥俄国政府开始，至“我”被指派暗杀任务结束；

“中编”从“我”回到圣彼得堡巧遇妹妹、妹夫，至“我”避开巡警搜捕结束。余下的部分，即如何混入列车安置炸弹、计划被打乱、跳车逃跑等内容，没有再以“《虚无党俄国皇帝》（下编）”的形式发表。根据笔者最新发现，这部分内容被陈景韩译为《虚无党炸弹》，署名“冷”，刊登在《旅客》杂志第2卷第1期（1909年1月23日）上。《旅客》是1908年9月12日（光绪三十四年八月十七日）由沪宁铁路局附设的进行社创办的刊物，1909年11月27日第2卷第45期发行后停刊，陈景韩是该杂志的重要撰稿人\*4。

（图1：陈景韩译《虚无党炸弹》首页，见《旅客》第2卷第1期）



综上所述，陈景韩完整地翻译了松居松叶译《虚無党奇談》的第五章「人民を賣る犬」，但是通过《月月小说》和《旅客》两种杂志才将其刊载完毕。这与第三章的发表经历十分相似。为了清晰地展示陈景韩转译、发表 *Strange Tales of a Nihilist* 的全过程，特此按照时间顺序，以表格的形成梳理如下。

表1：陈景韩转译 *Strange Tales of a Nihilist* 的刊载情况

译文题目	署名	刊物卷期/时间	底本/原作/备注 <sup>5</sup>
《俄国侠客谈 <sup>6</sup> ：虚无党奇话》 (第一) 政府……地狱	冷血	《新新小说》第3期 (1904.12.7)	【底本】「一 恐ろしき政府」 (松居松葉訳『虚無党奇談』警醒社書店, 1904.9) 【原作】“I. A Crooked Fate” (WILLIAM LE QUEUX 'STRANGE TALES OF A NIHILIST', New York: Cassell Publishing Company, 1892)
《俄国侠客谈：虚无党奇话》	冷血	《新新小说》第4期 (1905.1.6)	【底本】「二 シベリアの雪」 【原作】“II. On Trackless Snow”

(第二回)西比利亚之雪			
《俄国侠客谈：虚无党奇话》 (第三)我友伯爵夫人	冷	《新新小说》第6期 (1905.3.6)	【底本】「三 わが友伯爵夫人」前半部分 【原作】“III. My Friend, The Princess”
《俄国侠客谈：虚无党奇话》 (第三)伯爵夫人(一)	冷血	《新新小说》第10期 (1907.5.12)	【底本】「三 わが友伯爵夫人」前半部分 【原作】“III. My Friend, The Princess”
《短篇小说 女侦探》(上) (虚无党丛谈之一)	冷	《月月小说》2年1期(第13号, 1908.2)	【底本】「三 わが友伯爵夫人」 【原作】“III. My Friend, The Princess”
《短篇小说 女侦探》(下) (虚无党杂 <sup>7</sup> 谈之一)	冷	《月月小说》2年2期(第14号, 1908.3)	【备注】后以《女侦探》为题收入《冷笑丛谈》(群学社图书发行所, 1913.1初版/1914.3再版)。
《短篇小说 女侦探》(下) (虚无党丛谈之一)	冷	《月月小说》2年3期(第15号, 1908.4)	
《虚无党小说 爆烈弹》(上)	冷	《月月小说》2年4期(第16号, 1908.5)	【底本】「四 露國皇帝の生命」 【原作】“IV. The Burlesque of Death”
《虚无党小说 爆烈弹》(下)	冷	《月月小说》2年6期(第18号, 1908.7)	【备注】后以《爆烈弹》为题收入《冷笑丛谈》(群学社图书发行所, 1913.1初版/1914.3再版)
《虚无党小说 俄国皇帝》(上编)	冷	《月月小说》2年7期(第19号, 1908.8)	【底本】「五 人民を賣る犬」前半部分 【原作】“VIII. An Imperial Sugar Plum”
《虚无党小说 俄国皇帝》(中编)	冷	《月月小说》2年9期(第21号, 1908.10)	【备注】后以《俄国皇帝》为题收入《冷笑丛谈》(群学社图书发行所, 1913.1初版/1914.3再版)。
《虚无党小说 炸弹》 <sup>8</sup>	冷	《旅客》第2卷第1期 (1909.1.23)	【底本】「五 人民を賣る犬」后半部分 【原作】“VIII. An Imperial Sugar Plum”
《俄国之侦探术》	冷	《小说时报》1期 (1909.10.14)	【底本】「六 皇帝の間諜」 【原作】“XII. The Tzar's Spy”

由上表可知, 陈景韩将第一章「恐ろしき政府」和第二章「シベリアの雪」译为“(第一)政府……地狱”和“(第二回)西比利亚之雪”, 比较顺畅地连续刊载在《新新小说》第3期、第4期上。但是, 第三章「わが友伯爵夫人」的前半部分被他译为“(第三)我友伯爵夫人”刊登在《新新小说》第6期上时, 已与第二章译文的刊出时间相差两月之久。两年后, 他又对此重新翻译润色, 以“(第三)伯爵夫人(一)”为题在《新新小说》第10期(停刊前最后一期)上发表, 内容与第6期所刊《(第三)我友伯爵夫人》基本重复, 并非日译本第三章余下内容的翻译。《新新小说》停刊后, 陈景韩改换发表阵地, 时隔八个多月, 又以“女侦探”为题将第三章译出, 分三次连载在《月月小说》(第2年1-3期)上。《女侦探》可以视为第三章的完整翻译, 不仅涵盖此前发表的“(第三)我友伯爵夫人”、“(第三)伯爵夫人(一)”中所涉及的内容, 也完成了一直搁置的第三章后半部分的翻译。紧

接着, 陈景韩以“爆烈弹”为题翻译了第四章「露國皇帝の生命」, 分(上)(下)两回刊登在《月月小说》(第2年第4期、第6期)上。继而, 又将第五章「人民を賣る犬」的前半部分译为《虚无党小说俄国皇帝》, 连载在《月月小说》(第2年第7期、第9期)上。遗憾的是, 三个月后《月月小说》也停刊了。陈景韩迫不得已再次转移发表阵地。1909年1月23日, 他把第五章的剩余部分译出, 以“炸弹”为题刊登在《旅客》第2卷第1期上。此后, 这部小说的翻译再次中断。大约十个月后, 他终于将最后一篇, 即第六章「皇帝の間諜」翻译出来, 以“俄国之侦探术”为题发表在《小说时报》创刊号上。至此, 历时近五年, 跨越了四本杂志, 陈景韩终于完成了对 *Strange Tales of a Nihilist* 的转译之旅。

## 二、为何《冷笑丛谈》没有收录《虚无党小说炸弹》

陈景韩翻译的 *Strange Tales of a Nihilist*

系列小说中,《女侦探》、《爆烈弹》、《俄国皇帝》这三篇后来又被群学社图书发行所出版的《冷笑丛谈》(1913.1初版,1914.3再版)所收录。这不禁令人疑惑,为何包括《虚无党小说炸弹》在内的其他篇目不在其中?

《冷笑丛谈》共收作品13篇,包括陈景韩(冷血)6篇,包天笑(天笑)5篇,王钟麒(天僂生)2篇,均为小说。也就是说,该书虽然以

陈景韩和包天笑的笔名命名,但并非只收录了陈、包二人的作品<sup>9)</sup>。由表2可知,这13篇小说最初都发表在《月月小说》上。再来看未被收录的《虚无党小说炸弹》等陈译 *Strange Tales of a Nihilist* 系列小说,刊载杂志分别为《新新小说》、《旅客》和《小说时报》,均没有发表在《月月小说》上。这说明《冷笑丛谈》所收作品是从《月月小说》杂志刊载的小说中挑选的。

表2:《冷笑丛谈》收录作品及其初次刊登情况

《冷笑丛谈》目录	初次刊登情况
(一) 乞食女儿(冷血)	《月月小说》(第1年第10号)
(二) 破产(冷血)	《月月小说》(第1年第11-12号)
(三) 女侦探(冷血)	《月月小说》(第2年第1-3期(原13-15号))
(四) 爆烈弹(冷血)	《月月小说》(第2年第4、6期(原16、18号))
(五) 杀人公司(冷血)	《月月小说》(第2年第5期(原17号))
(六) 俄国皇帝(冷血)	《月月小说》(第2年第7、9期(原19、21号))
(一) 诸神大会议(天笑)	《月月小说》(第2年第1、5期(原13、17号))
(二) 世界末日记(天笑)	《月月小说》(第2年第7期(原19号))
(三) 空中战争未来记(天笑)	《月月小说》(第2年第9期(原21号))
(四) 赤斗蓬(天笑)	《月月小说》(第2年第11期(原23号))
(五) 古王宫(天笑)	《月月小说》(第2年第10、12期(原22、24号))
(一) 孤宦(臣-笔者注)碧血记(天僂生附)	《月月小说》(第2年第4期(原16号))
(二) 学究教育谈(天僂生附)	《月月小说》(第1年第12号)

那么,其选择的标准又是什么呢?这还得从《月月小说》与群学社图书发行所的关系说起。《月月小说》第1-8号由“月月小说社”和“乐群书局”共同发行,但是第9号起至第24号终刊为止,则改由“群学社图书发行所”发行。“群学社图书发行所”恰恰就是《冷笑丛谈》的编辑者和发行者。如表2所示,《冷笑丛谈》所收作品来自《月月小说》第10-19号、第21-24号。这说明“群学社图书发行所”是在自己所负责发行的卷期内选择作品的。另一方面,除了包天笑以外,陈景韩和王钟麒都是在“群学社图书发行所”接手《月月小说》后,才开始在该杂志上发表作品的。陈景韩在《月月小说》上共计发表作品6篇,均为翻译小说,散见在第10-19号和第21号上,全部被《冷笑丛谈》收录;王钟麒在《月月小说》上共计发表作品7篇,其中论说4种,小说

3种,散见在第9号、第11-14号、第16号、第20-21号和第24号上,仅2种小说<sup>10)</sup>被收录进《冷笑丛谈》;包天笑在《月月小说》上共计发表作品6篇,均为翻译小说,散见在第1号、第4号、第10-19号、第21-24号上,除《哲理小说铁窗红泪记》外,其他5篇小说均被《冷笑丛谈》收录(见表2)。《冷笑丛谈》目录页所写标题与封面有所不同,为“短篇小说冷笑丛谭”(见图2),说明该书所收作品均为短篇小说。因此,《哲理小说铁窗红泪记》之所以没有被收录,恐怕是因为该小说刊登在第1号、第4号、第10-12号、第14-16号、第18号上,篇幅较长。另外,该小说的连载跨越了“月月小说社”和“乐群书局”发行的时间段,这可能会导致“群学社图书发行所”受到版权等各方面的限制,没有选录的自由。清末民初时期,陈景韩、包天笑、王钟麒是沪上知名的报人作家,

他们是“群学社图书发行所”为重振《月月小说》而特地请来的“大咖”<sup>\*11</sup>。虽然他们的努力最终还是没能让《月月小说》长期存在，但是其作品仍然具有吸引读者的魅力。也许是出于这种考虑，“群学社图书发行所”才又将他们发表在《月月小说》上的作品汇集成册、出版发行。

“文艺时报”栏目刊登的《小说杂志界之冷淡》一文写道：

小说杂志，最先发起者为横滨《新小说》，其后有上海之《绣像小说》、《新新小说》、《小说林》月报、《月月小说》等。至于今日，均烟消火灭，以次停版。<sup>\*13</sup>

诚然，1902年11月（光绪二十八年十月十五日）创刊的《新小说》于1906年11月前后（光绪三十二年九月左右<sup>\*14</sup>停刊；1903年5月（癸卯五月初一日）创刊的《绣像小说》于1907年1月（光绪三十二年年底<sup>\*15</sup>停刊；1904年9月（光绪三十年八月初一日）创刊的《新新小说》于1907年5月（光绪三十三年四月初一日）停刊；1906年11月（光绪三十二年九月望日）创刊的《月月小说》于1909年1月（戊申十二月）停刊；1907年3月（光绪三十三年正月）<sup>\*16</sup>创刊的《小说林》于1908年10月（戊申九月）停刊。面对小说杂志界一蹶不振的惨淡，上海有正书局总经理狄葆贤于1909年10月（宣统元年九月朔日）创办了《小说时报》。该刊制定出以下方针，以弥补从前那些小说杂志的弊病，以图长期发展。

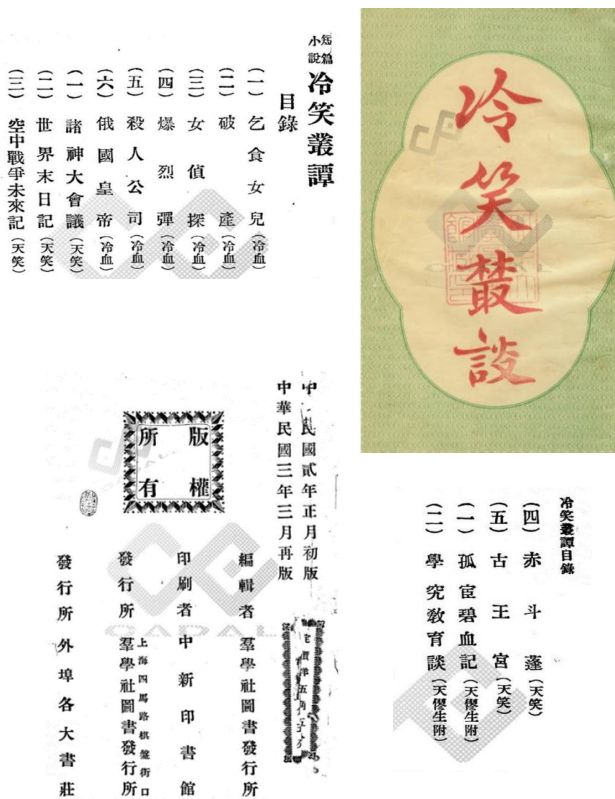
（一）本报每期小说每种首尾完全，即有过长不能完全之作，每期不得过一种，每种连续不得过二次，以矫他报东鳞西爪之弊。

（二）本报每月一期，每期均有定日。即或中有改变，亦必以半年六期为一结束。六期之内，决不中变，以矫他报有始无终之弊。

（三）本报每一期内，所有小说自成一结构，每半年六期内，又成一大结构。即便分阅，又宜合观，以矫他报东拖西扯之弊。

（四）本报每期均用大纸，每页均用五号细字，每种小说接头处，均有笔配图画补满，以矫他报纸多字少之弊。

（五）本报每种小说均有图画，或刻或照，无不鲜明，不惜重资，均请名手制成，以矫他报因陋就简之弊。<sup>\*17</sup>



（图2：《冷笑丛谈》封面、目录、版权页<sup>\*12</sup>

综上所述，“群学社图书发行所”编辑《冷笑丛谈》时，挑选作品的唯一标准就是陈景韩、包天笑、王钟麒在《月月小说》第9-24号上发表的短篇小说。《<sup>虚无党</sup>炸弹》虽然是《俄国皇帝》的下篇，但是因为沒有发表在《月月小说》上，所以自然没有成为《冷笑丛谈》的收录对象。

### 三、陈景韩译文的刊载折射出的晚清期刊兴衰史

陈景韩辗转4种杂志才将 *Strange Tales of a Nihilist* 的译文刊登完毕，折射出晚清小说期刊的短命现象。1909年11月《小说时报》第2期

陈景韩转译 *Strange Tales of a Nihilist* 的曲折发表历程，恰恰反映出以往期刊不能在同一期内完整刊登一部小说的“东鳞西爪”之弊。以上言及的《新新小说》、《月月小说》、《小说时报》，都是陈景韩积极参与运行并大量发表小说的杂志。这几种刊物的创刊与停刊，均伴随着一班撰稿人群体的转移。1907年5月《新新小说》停刊后，《月月小说》几乎在同时也面临了一次短暂的停刊。李志梅在《报人作家陈景韩及其小说研究》中提到：“光绪三十三年四月（1907年5月—笔者注），《月月小说》在第八期出版后突然中断……五个月后（光绪三十三年九月初一，1907年10月7日—笔者注），由沈济宣等筹资，许伏民任总编辑，《月月小说》（第9号—笔者注）才重新出版。但此时，撰稿人有一些调整，除吴趼人、周桂笙继续撰译外，陈景韩和包天笑作为头号招牌被聘进《月月小说》”<sup>\*18</sup>。从第十期（1907年11月—笔者注）起，陈景韩的作品开始登陆《月月小说》。1907年5月—10月，《月月小说》莫名其妙停刊的五个月，应该是以陈景韩为中心的《新新小说》与《月月小说》两班人马进行重大重组的筹备时期。然而，好景不长，1909年1月《月月小说》被迫停刊。陈景韩和包天笑于1909年10月跟随狄葆晋进入《小说时报》工作，成为《小说时报》的两大主笔。那么，1909年1月—10月这一段不算短的时间里，陈景韩与小说期刊绝缘了吗？事实并非如此。1908年9月12日创刊、1909年11月27日停刊的《旅客》杂志正好成为了这段时期陈景韩发表作品的重要阵地。该刊从第一期开始在卷首连载论说《说旅客》，至停刊为止共计63回，是陈景韩为《旅客》杂志量身打造的看板。不仅如此，他还在《旅客》上发表了8篇翻译小说和创作小说。特别值得注意的是，1909年1月23日发行的《旅客》第2卷第1期上，除了《虚无党炸弹》以外，还刊登了陈景韩翻译的《亡国小说 田猎犹太人》和《侦探小说 俄德两君之密会》。由此可见，《月月小说》停刊之前，陈景韩便已开始向《旅客》杂志转移精

力，《月月小说》停刊之后，《旅客》则顺理成章地成为了他的发表阵地。然而，1909年10月《小说时报》创刊后，陈景韩将精力投于此，失去了重要主笔的《旅客》不久就迎来了终刊的命运。

综上所述，陈景韩转译、发表 *Strange Tales of a Nihilist* 的过程中，伴随着晚清多种文学刊物的兴衰更迭。特别是《旅客》杂志，看似微不足道，却是中国近代期刊发展史上的重要一环。在小说杂志青黄不接的特殊时期，它发挥了弥补空缺、为作家、翻译家提供发表园地的作用。 ㊦

本文系国家社科基金青年项目“中国近代翻译文学中的日文转译现象研究（1898-1919）”（15CWW007）、国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理（1870-2000）”（17ZDA277）的阶段性成果。

（作者单位：同济大学外国语学院）

#### 【注】

- 1) 阿英：《翻译史话》，见《小说四谈》。上海：上海古籍出版社，1981年，第238页。
- 2) 相关研究有：詹宜颖《虚无党小说的跨境之旅——关于 *Strange Tales of a Nihilist* 英、日、中三个版本的考察》（《东亚观念史集刊》第13期，2017年12月）、国蕊《伯爵夫人的转译旅行——从对〈虚无党奇话〉翻译与改写看陈景韩启蒙意识的转变》（《沈阳师范大学学报（社会科学版）》2018年第1期）。
- 3) 詹宜颖：《虚无党小说的跨境旅行——关于 *Strange Tales of a Nihilist* 英、日、中三个版本的考察》，载《东亚观念史集刊》第13期，2017年12月，第153页。
- 4) 王玉、梁艳：《清末〈旅客〉杂志小说目录》，《清末小説から(通訊)》第138期，2020年7月1日。
- 5) 日文底本为ウィリアム・ル・キュー原著、松居松葉訳『虚無党奇談』警醒社書店，1904年9月；原作为 WILLIAM LE QUEUX “STRANGE TALES OF A NIHILIST”，New York: Cassell Publishing Company, 1892。表中首次出现时注明出版信息，以下仅标注



章节目录。

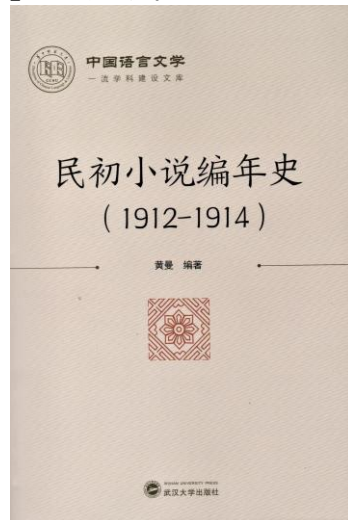
- 6) 《新新小説》第3、4期目录中写：“俄罗斯侠客谈”。此表中的题目为笔者依据译文首页抄写，下同。
- 7) “杂”应为“丛”字之误。
- 8) 此为笔者最新发现。
- 9) 国蕊称：“群学社图书发行所于1913年编辑出版了冷血和天笑的短篇小说集《冷笑丛谈》，集中收录二人的13篇翻译小说”（《伯爵夫人的转译之旅——从对〈虚无党奇话〉翻译与改写看陈景韩启蒙意识的转变》，《沈阳师范大学学报（社会科学版）》2018年第1期，第129页），此种说法不准确。
- 10) 另外一种小说为《侦探言情小説 玉环外史》（共7章），未被《冷笑丛谈》收录恐怕是因为篇幅较长。
- 11) “又添聘了冷血、天笑、天僂，三位赫赫有名的大文豪，把内容改的改良，照的照旧，居然又烘烘烈烈的燃起来了。”（见报癖：《论看〈月月小説〉的益处（白话体）》，《月月小説》第2年第1号（原13号））
- 12) 图片来自 CADAL（大学数字图书馆国际合作计划），为北京大学图书馆藏书。
- 13) 《文艺时报：小説杂志界之冷淡》，《小説时报》1909年第2期。
- 14) 樽本照雄：《〈新小説〉的出版日期和印刷地点》，见樽本照雄著，陈薇译：《清末小説研究集稿》，济南：齐鲁书社，2006年，第216页。
- 15) 樽本照雄：《〈新小説〉的出版日期和印刷地点》，见樽本照雄著，陈薇译：《清末小説研究集稿》，济南：齐鲁书社，2006年，第209页。文迎霞认为《绣像小説》停刊时间在光绪三十二年十一月廿九日（1907年1月13日）至十二月十七日（1907年1月30日）之间（见文迎霞：《关于〈绣像小説〉的刊行、停刊和编者》，《华东师范大学学报（哲学社会科学版）》第38卷第3期，2006年5月，第37页）。
- 16) 郭浩帆：《〈小説林〉创办刊行历史回溯——从小説林说起》，《贵州大学学报（社会科学版）》第23卷第2期，2005年3月，第96页。
- 17) 《本报通告一》，《小説时报》1909年第2期。
- 18) 李志梅：《报人作家陈景韩及其小説研究》，华东师范大学博士学位论文，2005年，第81-82页。

## 民初小説年表の最新成果

——黄曼『民初小説編年史』について

樽本照雄

黄曼編著『民初小説編年史（1912-1914）』（武昌・武漢大学出版社2021.5）である（以下『民小史』と称する）。



民初小説についての基礎資料が刊行されたことを喜ぶ。

本文は12頁から484頁までである。そのすべてに目を通した。紹介をかねて感じることを述べる（本稿の一部は清末小説研究会ウェブサイト2021.11.22で報告した）。

### 全体の紹介

書名に「民初」とある。カッコ内に示すとおり1912年1月より1914年12月までの3年間に

発表された小説を対象としている。

「凡例」によるとこの3年分は「民初小説編年史」の一部分だという。黄曼は1912年から1916年までの新聞雑誌を閲覧して編集した(陳広宏「序」)。将来、残りが継続して刊行される可能性もあるかもしれない。

書名の「編年史」は日本でいう「年表」という意味だ。

配列の方法は発表の時間順に小説作品を掲げる。日付単位だから詳細になる。新聞に連載された小説のばあいは作品名と作者および掲載誌がくり返される。日付のない月だけ、あるいは月日不明の雑誌は後ろにまとめる。新聞掲載の作品ばかりではなく関連する記事、広告までも収録する。実際にそのとおりになっている。丹念な仕事である。

以上を見れば陳大康『中国近代小説編年史』全6冊(北京・人民文学出版社2014.1。略称は[編年])の編集方針とほぼ同じであることがわかる。すなわち陳大康年表が清末で終わっているのを黄曼が継続して民初というわけだ。

参考になる先行文献の一部を次に示す。

孟兆臣『中国近代小説史』北京・社会科学文献出版社2005.10

劉永文編著『民国小説目録(1912-1920)』上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社2011.12

羅紫鵬「附録1:《申報》小説家及其作品一覽表(1907-1919)、《新申報》小説家及其作品一覽表(1916-1919)」『《申報》《新申報》小説家述考(1907-1919)』北京・中国社会科学出版社2018.12

年表と目録は違うが以上の刊行物と重複する箇所もある。かまわない。参考資料が複数あれば相互検索ができるからより便利だ。

## 新しい発見と注意点

樽目録と比較対照した。結論からいえば全2622件について点検することになった。

従来の目録では見ない新聞雑誌が採取される。『中華民国公報』、浙江嘉善『善報』、『民生日報』、『愛国小説報』、『中華童子界』などだ。その結果、樽目録に新しく234件を追加した。

『民小史』に収録する小説は新聞(報紙)と雑誌(期刊)に掲載されたものに限る。

時期的にみて商務印書館版「説部叢書」が収録されているだろうと期待した。しかし単行本は採取対象にしない編集方針らしい。「凡例」に単行本は排除するとは明記されていない。しかし単行本で唯一収録されたのは『時事新報小説合編』(上海・時事新報館1912.10。133頁)のみだ。原則から外れる理由は知らない。

そうであるから書名を正確に記せば『民初報刊小説編年史』である。見ていない単行本を別の目録から無断借用するよりも良心的ということができる。

新聞に掲載された作品はすべて採取する方針となっている。これは記述に手間がかかる。連載長篇小説ならば連日のように掲載紙と作品名、作家名がくり返される。これが3年分にもかかわらず1冊分のページ数を必要とした理由だ。

たとえば上記劉永文『民国小説目録』では新聞連載作品の第1回だけを採取しているものがある。『民小史』はその欠けている継続部分を補って途中の掲載をすべて掲げる。

ところが途中を省略するばあいがあるのも事実だ(略号[民小史]の数字は頁数。刊年は簡略化する)。

「男女現世宝」『新聞報』[民小史27] 叢録、白話章回、1912.3.1。至本月6日止。

「女兒魂」『大共和日報』[民小史62] 文言、1912.5.24。至5月31日止。

「覆轍鑑」『新聞報』[民小史114] 白話章回、1912.9.5。至本年11月9日《新聞報》止。

結果として不統一である。その理由は不明だ。実物で確認した作品だけを掲載している。『民小史』の特色のひとつだ。ゆえに新聞雑誌で欠号があれば収録しない。推測で記入する危険性を黄曼はよく理解している。それだけ信頼できるという意味でもある。

実物を確かに見ている証拠をひとつだけ掲げる。

『東方雑誌』第9巻3号(1912.9.1)に掲載された「五十故事」がある。「五十故事」は総称であってその下に複数の作品が収録される。その1作品を示して目次は「蜘蛛之露布」だ。本文は見ずに目次の記載をそのまま採取する編集者が多い。ところが黄曼は本文にある「電電之露布」を示した。本文で確認していることがわかる人だけが理解するだろう。

あるいは上述陳大康年表に記載された発行年についての誤りを発見することもある。1912年で両目録は交差するからそういうことが生じる。つぎの連載作品だ。

葛麗斐史著 天游訳述「(理想小説)新飛艇」  
『東方雑誌』第8巻第1-12号 宣統三年二月二十五日(1911.3.25)-1912.6.1

陳大康年表は連載途中の第8巻第11号の刊年について以下のように記す(比較しやすいように刊年を整えた。下線は筆者)。『民小史』の記述と並記する。

【編年⑤2310】第31-34章、第8巻第11号、(宣統三年民国元年旧曆)十一月二十五日(1912.1.13)

【民小史51】白話、第8巻第11号、1912年5月1日

下線部の新曆「1月13日」と「5月1日」では刊行月日が異なる。1911年10月10日(旧曆八月十九日)が辛亥革命だ。新曆1912年1月1日に

なるのは旧曆宣統三年十一月十三日からである。清末から民国へ移行する混乱期だ。刊行物によっては刊年表示が旧曆だったり新曆にしたり複雑に併存している。民国になっても旧曆を使用する雑誌もあるから一律ではない。

上記の両者が一致しないから『東方雑誌』該号奥付で確認する。変化を見るため前後号の刊年も示す。○印をつけたのが【編年⑤2310】と【民小史51】で一致しない第8巻第11号だ。

第8巻第8号 宣統三年八月二十五日発行

第8巻第9号 辛亥年九月二十五日発行

第8巻第10号 中華民國元年四月初一日発行  
(中国大事記 自辛亥九月十四日至民国元年三月初十日)

○第8巻第11号 中華民國元年五月初一日発行

第8巻第12号 中華民國元年六月初一日発行

不許複製	表日價告廣誌雜方東	冊	出	月
中華民國元年五月初一日發行	特等底頁外通(封底底頁之裏面及圖書論說) 每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	第地位一册三册半年全年	定價及發售三	項
發行所 上海商務印書館	普通半面十二元三十三元六十元	特等一面四十一元一百一十二元一百一十五元二百四十五元	郵政費	目
發行所 天津商務印書館	面二十五元五十五元一百元一百六十元	本國三分一角八分三角六分	日本三分一角二分	册六册十一册
發行所 漢口商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	國外一角二分七角二分一元四角四分	郵費	册一册
發行所 廣州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 北京商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 濟南商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 鄭州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 徐州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蘇州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 無錫商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 常州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 鎮江商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 揚州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 南通商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蕪湖商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 安慶商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 九江商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 漢陽商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 長沙商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 重慶商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 成都商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 昆明商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蘭州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 西寧商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蘭州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 西寧商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蘭州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 西寧商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 蘭州商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册
發行所 西寧商務印書館	每行五角半 一元五角二分 一元八角四分 一元五角	郵費	郵費	册一册

『東方雑誌』第8巻第11号

上の第10号掲載「中国大事記」の「辛亥十一月十二日」の次項目に「中華民國元年正月初一日」を掲げる。そこで新曆採用について次のように述べる。「改用陽歷……以黄帝紀元四千六百零九年辛亥十一月十三日。為中華民國元年元旦。經各省代表議決。由總統頒行」(8頁)

『東方雑誌』は第8巻第10号より刊年を新曆表記に切り替えた。だから第11号の「中華民國元年五月初一日発行」は当然新曆である。「初一

日」と旧暦を思わせる表記だが事実上新暦だ。

少なくとも【編年⑤2310】の「旧暦十一月二十五日(1912.1.13)」ではない。写真で示したとおり【民小史51】が正しい。調べたうえでの結論だ。

大量の新聞雑誌をひとりで採録記述するのだから間違いも発生する。民初の新聞雑誌では印刷が不鮮明なばあいも往々にしてある。誤認が出てくるのはしかたのないことだ。

署名の「東塾」を黄曼は「東塾」と記す。利用者は実物を見て確認する必要がある。

あるいは「𠂔叟」を「𠂔叟」とする。印刷所が該当漢字を所有していないのか。従来の目録(樽目録を除く)は「𠂔」を当てて見ぬふりをしてきた作者名だ。

あるいは『民小史』掲載に当たって作品名の一部が欠けてしまった箇所がある。カッコを補って黄色で示すと次のとおり。

430頁「滑稽小説《假陳天(華)》」。440頁「復仇小説《殺人(女)》」。462頁「俠情小説《劍声(花影)》」。

なんらかの手違いでデータが部分的に消失したらしい。校正でも見逃した。

以上、細かなことを指摘した。全文を点検したことをいうためだ。

小さな字句の異同は気にする必要はない。工具書の最終目的は実物に到達することだとは誰でも理解している。必要に応じて使い分ければよい。手掛かりはいくらあってもよいのが常識だ。最終的に利用者の判断にまかされている。

## まとめ

以上をまとめて以下のとおり。カッコ内で筆者の感想を述べる。

- 1 実物で確認したもののみを採取している。(堅実な方針だ。もっとも見ていない新聞雑誌は記載のしようがない)
- 2 著者などは実物記載のままを採取する。

(翻訳ならば原作名、原作者などを一歩深めて注記しない。それをやりはじめるとページがいくらあっても足りないだろう。ありのままを記載するところで止めるのもひとつの見識である。陳大康年表がそれを実践している)

3 単行本は収録しない。新聞と雑誌掲載作品だけを採取対象とする。(単行本については別のものを見ればほぼ解決する)

4 人名索引、作品索引は作成されていない。(学術資料には不可欠だと思う。残念なことだ。あるいはそれを備えた次の刊行が予定されているかもしれない。とりあえず樽目録第14版(2022)に取り込んだ。こちらは全文検索が可能である)

5 同じ活字を並べているだけで読みにくい。(編集上の問題である。工夫のしかたはいくつもあった。日付を太活字にする、罫線を引くなどの処置があればかなり読みやすくなったと思う。陳大康年表の方式を取り入れたからそこまでは考えなかったようだ)

利用者はこの『民小史』を手元に置いて各種目録、年表などと相互検索するだろう。そうすると作品名、作者名、掲載時期など異なる箇所が見つかるばあいがある。どちらが正しいかは各自が実物で調べて解決するほかない。工具書の責任にしないほうがいい。

なお編者不記『清末民初報刊小説目録(1815-1919)』期刊巻、報紙巻(出版社、刊年ともに不記)について紹介する機会もあるだろう。 罍

## 清末小説から

- 柳 和城○【書評】被暗殺的商務印書館創始人『澎湃新聞』2021.11.26電字版
- 汪 家榕○橡皮股票風波中的夏瑞芳『出版博物館』2009年第2期(総第6期) 2009.6

- 梁 艶○原抱一庵訳「ジャンバルジアン」の底本について 『COMPARATIO』14 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会 2010.12.20 電字版
- ○清末翻訳小説に見る訳者の啓蒙意識：『レ・ミゼラブル』の漢訳「逸犯」をめぐる 『中国文学論集』40 九州大学中国文学会 2011.12.25 電字版
- ○清末民初における『レ・ミゼラブル』の移入と日本：陳景韓訳「哀史之一説逸犯」を例として 『COMPARATIO』15 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会 2011.12.28 電字版
- 胡全章編○『楊世驥文存』北京・中国大百科全書出版社2015.7
- 陳 鵬安○転訳中の“報恩”模式轉換——以吳禱訳《俠黒奴》為中心 『東北亜外語研究』2019年第4期(総第27期) 2019.12.15 電字版



- 編者不記○『清末民初報刊小説目録(1815-1919)』期刊卷と報紙卷、出版者、刊年ともに不記(郭輝か)
- 文 娟○『前『五四』時代の文化符号：商務印書館与中国近代小説』桂林・広西師範大学出版社2021.6
- 葉 嘉○『通俗与經典化的互現：民国初年上海文藝雜誌翻譯研究』台湾・華藝數位股份有限

- 公司2021.6
- 石 曉岩○『文学翻譯与中国文学現代轉型研究(1898-1925)』北京・社会科学文献出版社 2021.7
- 王 琳○『五四時期兒童文学翻譯研究』成都・四川大学出版社2021.8
- 黄 嗣○『中国出版家・夏瑞芳』北京・人民出版社2021.8
- 管 新福○『晚清民国西学翻譯墟論』北京・社会科学文献出版社2021.9
- 康 玲玉○1913年《大共和日報》胡適佚文考 『中国現代文学研究叢刊』2021年第10期(総第267期) 2021.10.15
- 黄鉄、徐振華○『新青年』上の蘇曼殊——打開新文化運動的一個視角 『中国現代文学研究叢刊』2021年第12期(総第269期) 2021.12.15
- 岡崎由美、寺村政男、増子和男、稲畑耕一郎○先学を語る——澤田瑞穂先生 『東方学』第143輯 2022.1.31
- 武田雅哉・加部勇一郎・田村容子編著 ○『中国文学つまみ食い——『詩経』から『三体』まで』ミネルヴァ書房2022.2.25

『晚清北京的文化空間』夏曉虹主編

北京大学出版社2021.11

- “都市想像与文化記憶叢書”総序 ……陳平原
- 引 言 ……夏曉虹
- 正陽門の庚子劫難 ……郭道平
- “貴胄女学堂”与晚清北京女子教育 ……黄湘金
- 《京話日報》(1904-1906)の旗人色彩 ……王鴻莉
- 晚清京劇旗装戲与旦行花衫の興起 ……劉炳嶼
- 田際雲与北京“婦女匡学会” ……夏曉虹
- 《孽海波瀾》与北京濟良所 ……楊早、凌雲嵐
- 晚清北京“春阿氏案”の文本解読 ……郝凱利
- 作為游賞場所与文化空間の万牲園 ……林 崢
- 清季汪精衛刺撰政王案始末 ……袁一丹
- 民初北京陳繩被害案背後的文化心態 ……宋 雪

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>